夏より秋へ
晶子

夏より秋へ
晶子著

夏より秋へ
晶子
中

文學博士上田敏先生に獻ず。

夏より秋へ

與謝野晶子

琴の音に巨鐘のおとのうちまじるこの怪しさ
も胸のひびきぞ

人の世の掟の上のよきこともはたそれならぬ
よきこともせん

くろ髪の女の族は疎けれどわが師となりぬ人
うらむ時

戀と云ふ紅き下著の上に著るおらんだ染のも
の好の夢

御心に突き入りし日のおもひ出のなどか今日
さへ潑剌とせる

被けものせんと心のすすむとき猿の頸にも眞
珠をば掛く

憶病か蛇かくさりか知らねどもまつはる故に
涙こぼるる

もの哀れ知れる心は日のうちに春のかぜ吹く
秋の風ふく

君故にあまた樂しき時すぐし死ぬ日となりぬ
神もかしこし

むかしの日姉とおもひし櫻草いもうととして
君と培ふ

人人はわが話にてしづまりぬ秋は斯かりと思ふ夜かな

むつかしや何を願へる心ぞや云ふまでもなし思はるること

わが門の二もと柳すこしづつ春めくころのあ
かつきの雨

わが閨にやがて丁字の匂ふ日の來らむなどと
他をおもへども

わがことを人みな賞めてありし時苦しかりし
に比ぶればよし

神田川その岸のまち霞まむと病めば都のうち
もなつかし

かへらんと更に思はずいにしへに前生の身に
君を見ぬ日に

ここちよく分ち能はぬ酔をしぬ目の前のこと
いにしへのこと

わが息の虚空に散るも嬉しけれ年の明けたる
一日二日

あめつちの白地の春に少女子の遣羽子の音金
砂子おく

大ぞらにしろがね色の花ぶさの見ゆとも思ふ
春の來ること

しろ石もみどりの石も美くしく春日の神の口
づけを受く

手弱女がましろに匂ふ手を上げて賞むべき春
となりにけらしな

不可思議のよもあらじとて入りも來し女の心
の臓ならめ君

●

鏡には何をとどむる不幸なる女王のゆめと帝
王のゆめ

君とまた再會すべき家としてしげるをめづる
いちじくの葉よ

二月(きさらぎ)や怒(いかり)をおびし丹(に)はなだの雲(くも)のうかびて霰(あられ)
ふるかな

清浄(しやうじやう)につゆよこしまのなきものに彼(か)の日(ひ)の戀(こひ)
もなりて終(をは)りぬ

わが知らぬことに喜ぶ群はなれ再びもとの片
隅に行く

わが君を深くうらむは危ふかりかたちのいま
だおとろへぬため

くろ髪やまだあざけりの心もて春に會はぬを
よろこべる人

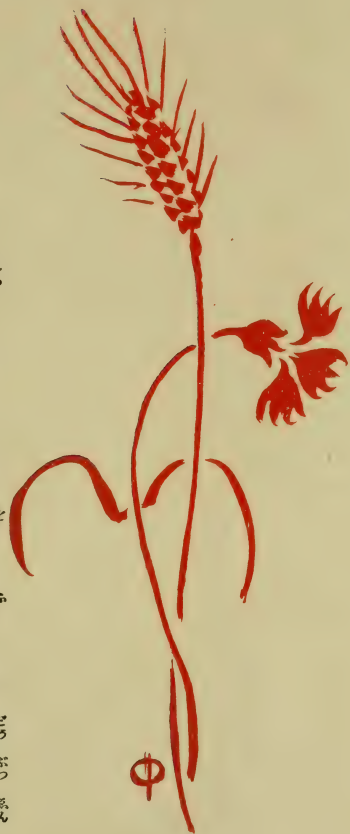
青き火に捲かると云はる戀すれば泉下の人の
魂に似るらむ

涙しぬ今人のごと戀と云ふ生死のたね蒔きし
ここちに

何やらの上に載せたる鍋見ゆる秋風の日の君
が家かな

紅梅に地獄繪のごと赤黒く入日のさせばいき
どほろしき

朝夕かたはらに笑む櫻草はたかたはらに泣く
さくら草

ほのかにも白きけものの尾を振りぬ動物園の朝靄の中

わが子の目うるみてやがて隠れたる障子のそとに春の雨ふる

人の世は貧しき心もちたるもわれの如きもお
なじ戀する

いさかひてはてては涙もながしけりこれを寒し
と更におもはず

よく知りぬ次の刹那に自らを笑はしむべきあ
りのすさびと

戀をして趣のなき終をばめでざる人のふとこ
ろの劍

淺みどり柳の枝の中行ける紺のきものの春の
夕ぐれ

三月の柳を折りてあまりにも物をかくさぬ風
流男を打つ

佐保姫にしら玉姫におないどし去年も今年も
來ん年もまた

見ることをあへてせざるはこの人も彼も弱さ
の同じければぞ

うら庭の千日紅を血まみれの花と忌むなり物
に怖れて

いと寒くかなしきままに明るみへすべり入る
なり我が朝の夢

わが吐くは瀕死の息と思ふかな白くかぼそく
深く苦しく

一人のわれに答ふるものも無し下部の如き面
そむけつつ

たゆければ日の仰がれず紫の幕に隠れて又出でずわれ

地をまろぶ落葉にまじりらうたしや山より來る鳥の足音

かにかくに我身や人と異れるこの賑やかさこの寂しさよ

人おもふ涙は紅き絹となりひるがへるなりわが前の爐に

灰色のあはれなる顔する群はうたへる日なく

舞へることなし

この君につけて物のみ思はると云ふ下心はか

なまず身を

筆をもてあらがひかくす秘言もみなうつくし
やこの君のこと

わが涙重きおもひをする日より戀しなど云ふ
唯事に落つ

夜となればをはりの近さ知ると云ふ朝は若さ
を見よとわれ云ふ

硝薬のにほひくすぶるここちしてわが黒髪の
ここちわろき日

松原の鵠のつばさのさにづらひ日昇るらしも
大わたつみに

春の水あふるる音を何よりも悲しとおもふ我
に似たれば

少女等が白ちりめんを糸に縫ひつくり出せる
驢馬とおもひぬ

わが見し日戀にやらはれ來しと云ふ乞食に君
は過ぎざりしかな

ことよろづ若き心にまかす人我等が末ぞあは
れならまし

そよ風の春のあかつきとらへ來て我に這はせ
よ水いろの雲

青柳あなづり初めて目におかぬ三日目の小雨
髪に沁むかな

戀と云ふ欲のみ生きて自らと云ふたのもしき
ものは死に行く

花の草しろき紫おなじ程さびしきいろをつくるたそがれ

與へずば奪はんかくと叫びたる荒き力もゆるむ日のきぬ

酒なるか劇毒なるかみづからを生ある限り吸はまほしけれ
ことわりに心ぐるしと思へるは皆外ならぬみづからのこと

うるさしや小鳥の話あかずする客人早く鳥と
なれかし

大いなる赤き舌吐くこころよき魔を傍らにし
てまし夕

磯はまの貝の紋をば見るごとく石の上這ふ春
のかげろふ

この君は河に小川の入りたりし戀とことわる
そのかみのため

人とする話を避けて與之助がまぼろしつくる
山ざくら花

ほのかなる遠山の色うち見つつ思へる時にお
もふ君きぬ

なほいまだもの落しつる心のみゆめもならは
ずわが戀の上
ほのじろき李の花に降る雨も見て心燃ゆ人を
戀ふれば

西の京浪華の街の思はるる靄の降る日となり
にけるかな

いにしへの奈良の御寺の内陣を歩む心地に臘
梅を嗅ぐ

戀はしもこの人の世にゆくりなくわがやとひたる船とこそ思へ

久方の日の光よりたふとしと片戀をだに思へるものを

わがつくる諸善諸悪のみなもとをかへすがへすもすこやかにせん

春きたり遠方人に文書くと少女にかへり手ならひぞする

おほらかに大寺めきて煙曳くわが春の日の磁
の香爐かな

よろこびぬ浮彫したるきよらなるうす桃色の
春の初めを

南風けうとく吹きしのちに降る三月の雨涙の
ごとし

そのむかし人と戀とに別ありき衰へぬれば相
ぞとぶらふ

心いとめでたき人の常なれば女王とよびてあなぐらに居る

いそのかみよくかくろへて書きしにも劣らぬことを思へばぞ書く

自(みづか)らの心(こゝろ)に我(わ)れとことわりををしふる時(とき)の苦(にが)
きあぢはひ

険(けは)しさとやはらかさとをもてること自(みづか)らわれ
をいたましめつつ

いつよりか我やわが身をうとみけんかく思ふ
時涙こぼるる

むかしより心の奥に流れたる冷き水につひに
おぼるる

水色の寝間著のままにすと通る十疊の間の大鏡かな

初夏の夕ぐれの庭わが前をかずも知られずしら玉はしる

野やしろの石のこまいぬそのもとのあたたか
かりし馬ごやしかな

水に居る身ぞとおもへりわが梳ける髪の前な
るうす青の雲

ものは皆いづちともなく消ゆるもの忘るるも
のと知りてはかなし

くれなゐと思へる胸に灰色の塔いつの間に建
てられにけん

わが心はからざりけるめぐりあひするごと時
に馴れぬもの見る
人間のうつくしさをば自らによりて思ひし日
も薄れ去る

家のうちうす暗き日もあてやかに白きめでた
き雛の顔かな

小ゆるぎの磯のあわびを人くれぬ上巳の雛の
大みさかなに

自らのこころの臓は人の飼ふ鳩と思へり生れし日より

若き日の戀ゆゑ書きしものの反古積みかさねればかくれ家となる

盡くるなき慢心のためおとろへずこの毒酒こ
そやさしかりけれ
よそほひに假に建てたる圓柱ならずとわれの
戀を云はまし

若き人そこはかとなく集りて夜は何かたるわ
がこと語る

うすものの夏も寒げに見ゆるまで痩せたる人
となりにけるかな

死ぬ夢と刺したる夢と逢ふ夢とこれことごとく君に關る

春の宵一人ばかりは悲しげに涙こぼさん人も來よかし

さばかりも戀を賴めるあどなさは呪咀にまさ
ると誰の云ふらん

くろんぼの男と女まじり居るここちす花と葉
おほき椿

わが障子あさみどりなる絽を張りぬ白き雨など注がせてまし

あとさきに嶋田に結へる人と我れ雨の後なる水たまり越ゆ

道のべに唯並ぶ木と自らをわが思ふこといつの日よりぞ

われいまだ人を娶りしことあらず君の心をいかで知らまし

あはれにも戀を見ぬ世の天となしいく日のの
ちに地獄にぞ置く

いささかのゆかりなきこと身を嚙みぬこれを
妬みと云ふや云はずや

日もすがら石を叩けり我よりも愁はしげなる
秋の雨かな

來し方をけものの跡と行くさきを己が路とし
見る如しわれ

外にまた似るもの無しと思ひたる高き愁にや
や近し秋

眞白なる涙をおとす役濟みてまぶた開けば春
の日となる

わが話きけば心のやはらぐと言ふ酒好の友の
白髪

まじものは數行の文字を見入ること久しき時
により來りける

われ生きん再び見じとおなじことあまたたび
云ふ善人のため

もの云ひてうしろ暗さを心知るこのおもむき
の忘られぬかな

つれなくもせせら笑ひの聲たてて夜通し爆ぜ
ぬうしや爐の炭

危ふかることし盡せる魔術師を賞め合ふごと
しいさかひの後

船の帆の海に浮く如わが欲のいとさやかに命
にぞ浮く

なつかしく靄引く朝は切岸も森の如くにもの
深く見ゆ

涙おつ吾れの心にそだちける眞白き鳥の羽を振る時

思ふこと半夜にいたり忘れんと道理のままの眠りに就きぬ

自らにへつらふ人にいくばくもことならぬ子のもの諫めする

百日ほど飛行したりしそののちの氣落のごとし今癒えぬべし

春寒しわがすがれたる姿をば旅役者ぞとおと
しめて泣く

わが子等がおしろいをもて青桐の幹に字かけ
ばうぐひすの啼く

夕風やすみれの海に浮島をつくる少女のまろ
き撫肩

夢に見ゆ阿片を吸へる赤き間の壁畫の中の廓
の女

春雨はまじへて降りぬ朱の夢さびしき人のしろがねの夢

尺すぎし萱の若芽のそれよりもかぼそき春の雨に君來ぬ

夜の夢まぼろしのゆめ何ごとも病めばかなし
や君あらぬ日に

戀ならぬ交り深しこのことばいと哀れにも初
めて思ふ

死ぬとせし目まひごこちのうちにさへ一色ならぬ心ぞと見し

何をする男女ぞわがことか白刃の背もて髪を打たるる

口びるを吸ひに來る時男こそ蛇體をなして空
翔るなれ

さびしけれわが許す人われを見て變化のもの
と思はずなりぬ

樂を約せる人となりたれど日の黑むことそれ
より起る
心には七八日ほど住はせつあざやかならぬ戀
の片はし

おのづから忘草をば人摘まば別れしわれは何
となるらん

うつくしく危きことにいどむ群さくらの花に
風なわたりそ

梅咲きぬ十五のわれのいひなづけまた見る世なし琴は彈けども

三輪の神アポロオの神おなじことしにくる神のうるはしきかな

とこしへに見る日なきためわれ呼びぬ十の指
組みさんたまりやと

月の夜や盥に飼へる金魚の子ほの赤くしてこ
ほろぎの啼く

にくげなき例の心のくせなれば我をも戀ひん
人も戀ふらん

消息す憂きは死ぬ程戀しかる同じ心の變らざ
ること

廊などのあまり長きを歩むとき尼のここちす
春のくれがた

櫻草白きうすでのさかづきに薬をつぎて守る
かたはら

山ざくら酒屋の前に積み上げし樽に乗るなる
春の日輪

桃色の春かぜの吹くこころより淨らなるなし
浮きたるはなし

春の夜の物語よりうすもののうごく如くに心
はなりぬ

われさびし有情のものの相よりて生くる世界
の中に居ながら

なげかれぬいのちか戀か知らねども終りちか
づく心ならひに

朝夕におのれあやふく思へるは病める身より
も病みたる心

前に居て戀のこころをあかしする人形はやも
飽きられにけん

そこばくの幻ふせぐ楯として君この人を見つ
め給ふか

君の手かよそ人の手かくづしける君のまたな
くめで給ふ像

牧の艸パンの神きて大聲に笑へる日なり白き
雨降る

春寒し今日も男のしなさだめ怠らぬ身の時に
泣くごと

しろがねの燭臺ひとつ中に立ちしめやかなる
は三十路のこころ

若き日はかるはずみごとなるもよし幸ありと
多く云へかし

しら鳥の船して銀の河ゆきぬ今日さへ我の威
ある心よ

世に怖ぢて思へる事は隱すとも美くしさをば
いかがすべきぞ

自らをめでざるまでに到りぬとわれ見え透き
しいつはりを云ふ

朝の家われのけはひのなりたりとしるしを上
ぐる土のかげろふ

秋の日はさびし切なし部屋の棚あらゆる花を
もて飾れども

まぼろしに目に見ゆること少しづつ異りゆく
も哀れなるかな

戀人はやぶさかなるを第一の惡とささやきと
もに笑まへり

春の晝われかへり見て語ることありげに雨の
草に降るかな

薄青きかなしみ我す夜ごとにすいつちよの啼
く秋の來れば

ここちよく打ちぢれたる髪見えぬ誰にかあらん秋のまぼろし

君がなすものに習ひき戀こそはたやすかりけれ得るも捨つるも

あめつちのうす墨の色春來れば塵も餘さず朱に變り行く

おもしろき繪を描きやると子を呼びぬ正月の來てなすことはこれ

庭に來る鳶の頭のはんてんの紺のにほひもよしや正月

わが見つる十七八の正月をよきこととして問ひ給ふかな

何人も幸住むと云ふことをうたがはず立つ春
の戸口に

きよらにも薄桃色に眠りたる兒のけはひの春
の日となる

あけぼのや雀かすめし山烏血をこぼし行くう
まごやしかな

觸るること甚だ深きにもあらず夢にもあらず
この頃のこと

こころよき秋の日早く來れかし飽ける男のその證見ん

夕ぐれの光に透きて動く人高樓にあり水色を著る

小法師があちこちの房うち叩き聲づくりする
秋の朝かな

悲しさのこよなき事も知らぬなりわが衰へは
何に本づく

くろき雲たちまち散じたるやうに身をもてなすも忘れんがため、
忍び妻三日が程をかくまへと云ふ文きたる大つごもりに

梅咲けば雁の羽色の壁などのものぎたなくも
見え初むるかな

わが足や踏みて走れるここちよく白雲の散る
月の夜の空

人はやく酔ひ給ふかなわが見つる海を語れば
戀を語れば

多きより多く戀する心をば路ゆき人にわれの
云はんや

おのが身のつながれし綱かみそりをもて切る
ごとし初秋の風

たぐひなきめでたさなりやわれ一人日の出づ
るより入るまでを見ぬ

しら玉はくろき袋にかくれたりわが啄木はあらずこの世に　（以下二首啄木の君を悲しみて）

死ぬまでもうらはかなげにもの云はぬつよき人にて君ありしかな

ものほしへ帆を見に出でし七八歳の男すがた
の我を思ひぬ

抱けるは唯ひとつなる戀ながらかひあるさま
に生涯を見ん

不覺なる君をば倒し少女子のわれを逃さぬ火
の鎌きたる

目に見えぬ不可思議國の手枷をば我れもはめ
らる若きならひに

こし方の語り難しやいかがせん君こころみに
戀をやすめよ

戀の家きづきおこしぬ久方のしら雲の上けぶ
りの上に

草むらに鬱金のひと葉まじりたり透きとほりたる秋風の中

口びるを押しあつるごと桃いろの椿ちりきぬ手のひらの上

戀と云ふ飛行の童まだ知らず岩室に居てくろ
髪を撫づ

もの欲しき心も知れる人なりとあさましがれ
ど甲斐のあらなく

桐の木の片側濡れて幹青ききさらぎの雨なつ
かしきかな

おぼろげに心おかるる我なりと君おもふ日を
つくらんは憂し

樂音と秋風と聞きうつそ身のけづらるる如も
の思ふわれ

金色の雲のとざせる胸と云ひ戀のおのれを神
のごとくす

たらちねの石の御墓に黄なる粉をちらせし椿
かなしき椿

夕ぐもは戀のやまひをする人のうはごとに似
てうつくしきかな

五月雨かびのにほひのする床に水のおと聞く
ふるさとの家

懲さんとこぶしを赤くしたる人二人行くなる
夕月夜かな

くらがりに縛められて心云ふ安かりし世のあ
たひ無さなど

わが心たからの櫃にをさめたるものと僞るは
ふらかしつつ

戀ゆゑに理をうしなひてある人も皆かばかりにものやかなしき

知る子みな懺悔をもたずあやまちはわづかにて止むものと思へり

人群れて黒き林を眺め居し夕の里の目に消え
ぬかな〵

うばたまの夜にあかつきに夕暮に哀れなりけ
り秋の物おと〵

つむじ風捲きてかたへに運びきぬいと遠やかに思へりしもの

一人のわれを貫き人の世と天とは通ずおもしろきかな

本を讀み流行の衣を欲しがりし娘も思ふふる
さとのこと

欲しがりしだんだら染もうづまきの模様も舊
りぬ忍びて笑ふ

匂ひする春の空より落ちきたり我を照すと思ふ小鏡

俯伏して閨に物書くすずびごとして憎からず黒髪の人

南風吹きあほる日はすさまじき老女の手見ゆ
春の日ながら

南宗寺大安寺いと尊かりこれらの寺のあかつ
きの門

（生れたる地の堺にて）

はかなきは戀するとのつたなさの昔も今も
ことならぬこと

人語る生れながらにめしひなる童子にものを
をしふる如く

鵠とびぬ波打際の砂ふみて春くることを君と語れば

人來りまたなき彩繪なりと云ふまだはかなかる三十年を。

夢に見し人とおなじき戀人を見るごと春は前にひらけぬ

手をのべて三月を呼び口びるを吸へと出して四月待つ

雨ののち棕梠の廣葉のみどり葉に紅梅うつる
春となりぬ

波のうへ三月の日の落つるまま紅のさうびの
花びらぞ散る

大きなる濕れる都かく思ふ春の夕のわが胸のうち

閨出でて曉ちかきわたつみの潮の音を聞く圓柱かな

春と戀力づけよと若き日のわがたましひに目くばせぞする
あてやかに華奢にましろき波をもて水草洗ふあかつきの風

戀ならば自然に寄らむ人一人來よと招くはか
らくりに似る

わが祖母のこれを初めに寺の門くぐれと撫で
しふり分の髪

自らの心のごとくいちじろし金錆色のさびしき胡蝶

春の日もたそがれ時にしたしみぬ二十の人はもののけのため

三味線の一の絃のみかき鳴し時雨通りぬ文書けるる時

夜となれば毒水を打つ神ありて身うちの痛む
われとおもひぬ

あら磯に唯ひと目見し白き鳥はた戀の君わが
夢はこれ

秒の間もあやまたずして逢ふと云ふ時に來ぬ
るも人とことなる

翅振りめぐりて飛びぬ黄の銀杏ぬるでの紅葉
われも飛ばまし

一人の私物に君見んと欲の進みぬ何となるら
ん

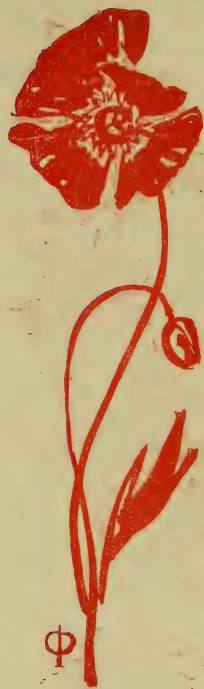
非常なる罪障によりほのほもて身のつくられ
し人ならめわれ

あな冷たき涙ぞ落つるしら菊は今日の後また獨
にて見じ

朝となり焔の夢を見る人も青き閨よりよろめきて立つ

すべからぬ事を手はせずしかもなほ持つべからざる心やらはず

初子をば持ちし頃より秋の日を悲しむ癖の附きにけるかな

ふるさとは戀しけれども浦島の筥ならぬかと訪はず七とせ

日出づれば生きものの皆ひんがしを禮拜するも何のゆかりぞ

なつかしき君なき年の春に遇ふこの心より哀れなる無し

しろき羽の小鳩の籠に溫室の牡丹を切りてさ
しぬ早春

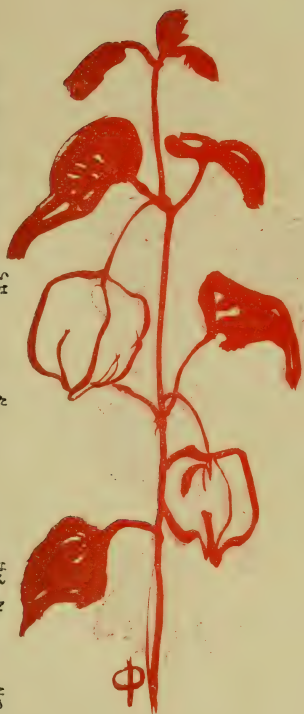
戀してふわれの心をこの君は下よりや見し上
よりや見し

身のあたり新に心ひくものはなべてあやふし
あぢきなきかな

人の云ふ正しからざる戀よりもまさに光を放
てるものを

わが小指琴をたたきて歌ふらく紫摩黄金の春とこそなれ

君を戀ひ夢まぼろしの中に居て濡せる筆の書きちらすこと

まぼろしに岩より垂れしお納戸の袂など見ゆ
初秋の朝

な蔑しそ心きのふと一昨日とまして此日と同
じからんや

あはれにも初戀のごと退きがたしと思ふほどの君と知れども

わが時は失はれたり涙もて築きしものぞすべて流るる

枝にきて野鴉なけば雨まじり八重のさくらの
薄赤く散る

まことには未だ死ぬべき憂ひなく十が一つに
髮ほそりけり

いとくらき夢とおぼえてあやしけれ鏡の中の
やつれし女

ともすれば世にめでたかる人として引かるる
人の戀のなしざま

この人を知りて多くの日を經つること忘れん
と思ひ立ちにき

尾を振りて浪を切り去る大いなる魚の姿は無
きかわが死に

華やかに初冬の風二側のたかき松をばうごか
して行く――
まぼろしの力を待てるやうなりしその相見る
日たちまちきたる

下町の浪華役者のうはさなど人來てすればう
ぐひすの啼く

三月のみどりの空の眞下なる磯のなぎさの魚
の生皮

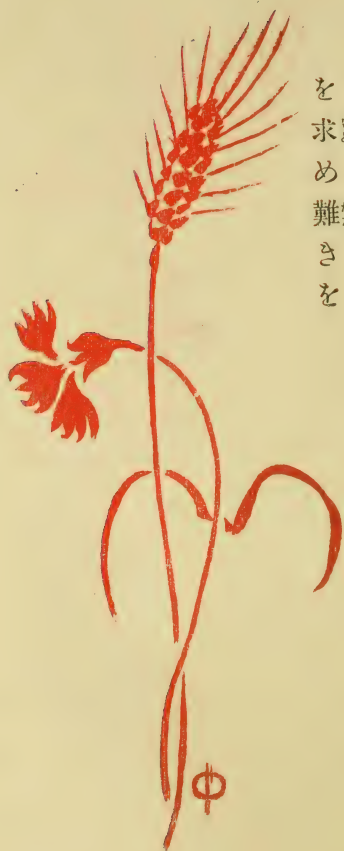
身に熱をおぼゆる人は生ぐさき血けぶりのご
とおもふ春雨

春の雨ばらの芽に降りニコライへ明神の鳩遊
びにぞ來る

大いなる濁れる川を赤き帆の船上りきぬ病める夜の夢

みづからの明方よりのおもひごと知れりと床のさくら草云ふ

うらみつつ泣きつつ戀を心をばにび色に染め
青色に染め

何ごとを忍び居たりし毛ごろもの一つ足らぬ
を求め難きを

君が戀やがておのれの血となりて再生の日を
早くせしかな

病ゆゑ身のおとろへて見る夢と白さの似たる
木蓮の花

つかの間も萬人の目のはなれざる身の苦しさ
に驕慢の湧く

なほおのれ口ごもりがちにもの云ふもうらは
かなしや人に交りて

やみがたき苦と樂みを一にしてある生涯のあわただしけれ

木の中の灰色の屋根たそがれにものおもふらし灰色の屋根

罌粟咲きぬさびしき白と火の色とならべてわ
れを悲しくぞする

百合の花青みて咲けばわが心ほのかに染みぬ
ものの哀れに

夏來ればすべて目を開く鏡見て人に勝るとす
るもこれより

あさみどり楓の木をば來てゆする夜明の風に
まじれり胡蝶

わが子等の青芝走りたづねよる兎の目にも夏の匂ひぬ

わが皐月今年兒のため縫ひおろす白き衣のこちよきかな

わが思ふ人にならべて見るものか華奢に艶め
く初夏の風

白き砂海にすべりて入る如き夜の遠方の山ほ
ととぎす―

ほととぎす夏山の吐く息づかひものもなげな
るその息づかひ

ほととぎす曉方近きわが山の上の空をば小車
はしる

いなづまの幾筋の火をはるかにも見下す山の
夜のほととぎす

ほととぎす既に餘さず君とわれかづらの徑を
湖に行く

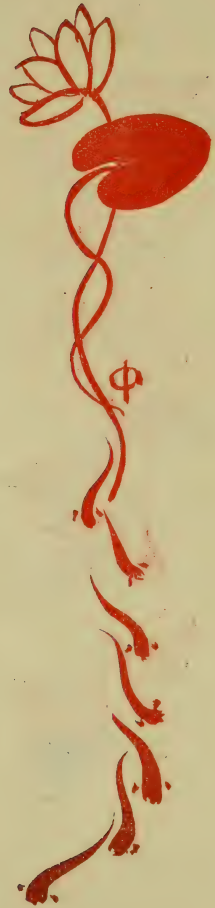
ほととぎす夜の黒板を打つものか強き音はた
かすかなる音

上敷の新しき香に夏ごころ親しむ夜のほとと
ぎすかな

山に居て細る指などうちながめもの思ふ時ほ
ととぎす啼く

六月は犯せる罪のかなしさのごと雨つづき杜
鵑しば啼く

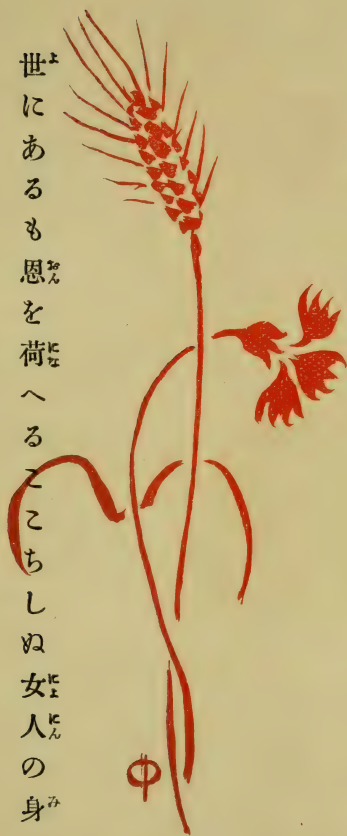
ゆく水も鳴りわななきぬほととぎす啼くとて
君に倚りそへる時

ほととぎす半夜を寝ねぬわが癖のこの頃とな
り人に知られぬ

ほととぎす谷(たに)の青葉(あをば)のくらきをば覗(のぞ)きてあり
ぬ冷(つめた)き岩(いは)に

ほととぎす針金(はりがね)を擦(す)る工夫(こうふ)よと憂(う)き寝覺(ねざめ)ゆゑ
後言(しりうごと)する

船に居て青き水よりいづる月見しここちする
うす黄の薔薇

大きなる日の落つるなど見れば憂し思ひ上れ
るわが心から

世にあるも恩を荷へるここちしぬ女人の身こ
そはかなかりけれ

われ守る神を忘るる日のありと懺悔をすれば
彼もしか云ふ

わが指(ゆび)の白(しろ)き爪(つめ)ほど日(ひ)のおちぬ君(きみ)と語(かた)れるく
さむらの蔭(かげ)――

誰(た)れの手(て)か心(こゝろ)に來(きた)りくまどりぬと云(い)ふばかり
の戀(こひ)物語(ものがたり)

戀ゆゑに人屑のごと見下す日われにありとは
思ひ及ばじ

憎氣なきのこぎりの音うぐひすの聲にまじり
ぬ閨いづる頃

石像のしろき足もと夕ぐれの白き足もと春の
足もと

おかれしは泉のもとか火の中かよそよりわれ
の見まく欲しけれ

春の雨障子あくればわが部屋の煙草のけぶり
散りまじるかな

唯の日もいけにへ者の死ぬ時に云ふごときこ
と思へる人ぞ

心より煙の立つと云ふことを二三日病みて知れる人かな

ここちよくわれよりものの流るるを戀の日に知り春の日に知る

木瓜の花馬のわきばら置きたると石をおもひぬ春の夕ぐれ

かなしくもこの木の質は烏羽玉の夜に花咲き白日に散る

ふと氣づく夕とわれの戀仲はみづみづしかり
君も及ばず

戀すれば間近にものの色かはるおもむきを知
るおもむきに觸る

いとにくしさとぞひらめくわが心呼べど呼べ
ども答へぬ心

ひろびろと心の川のかがやける日なりと君に
文かく我れは

美くしき言葉断たずば耳貸さん鸚鵡かあらず
傍の男

われは憂し生れながらにまぼろしをうちとも
なへる眼と思ふかな

わが船の寄らんとしつる島消えぬよしやあしやと驚かねども

ちさきもの喜びあひて手を振ると思ふ櫻の花の上の雨

咀はれて咲かぬ蕾の殘れるをわが胸に見ぬ一つなれども

入日する雲の明りに遠方の塔の尖見え黄ばむひと時

ため息をつくならはしも好しと云ふまた類ひなきなさけ人かな

しめやかに思ひあまれる息をして柳のおくに上りくる月

海見るに白き小舟のただよへる二町がほどを
好みぬ我れは

木瓜の花みだりに紅の封蠟を紙にこぼせば戀
ごこちする

いみじかる春の世界に寒き洞ひとつ作りてわ
が心おく

なほおのれ君のためには耳かさん手は君のた
め琴をとりつつ

遠方の人の戀とも心とも木の芽ほのかに萌え
出づるかな
うすものの襞の間に遊ぶ夢見るとおもへり君
と語るを

刄よりするどきものを持ちたるが二人寄るを
ば危くぞ思ふ

たかぶれる心の上に匍ひかかる灰色の靄いか
にしてまし

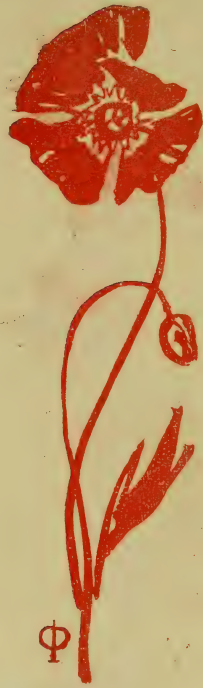
来し方のなげき未来のおそれごと皆持ちながら今をよろこぶ

わが指を噛まんとするや哀れなる女は人を刺すが難さに

み心は青空となりわが指にほぐらす細き絹糸
となる

青ざめし鏡の中の人なるか花めく戀を作るお
のれか

目に見えぬ疵あまたある心ゆゑ終に戀より離
れがたかり

湯氣のする輕きふるへのなまめかし裸のわれ
の身をばめぐりて

くろ髪や前うしろよりめでたかる春の世界ぞ
われにもの云ふ

ほつほつと麥の青めるところより風の吹きく
るわが湯殿かな

根をはなち針にさしても咲くものは春のさくらと若きこころと

戀と死とくらぶることは苦しけれ誰も病みてはかくまどふらん

わが心いかなる芽をもうち枯すわろき土とも
思ひ知りにき

憎からぬ音をも立てて二月のあられ打つなり
青桐の幹

雨雲の墨を流せる空の色さむからずして紅梅
の散る

しら梅や日の入り果てて後帰るわが門のうち
一町がほど

春の晝梯子の口に手を打てばこだまするなり
桃色の壁

終りまで唯あさはかに自らをもてはやすより
知らぬ身ならん

わが家の石の浴槽に淺みどり柳の枝のうつる
春かな

おぼつかなおもはく深きたましひは今日も離
れずありやあらずや

一生(いつしやう)はさんたまりやの繪(ゑ)のやうに金粉(きんぷん)をもてぬられずもがな

あめつちの中(なか)に休(やす)まず遊事(あそびごと)する小(ちさ)きもの美(うつく)しきかな

君にまた他人につけて我こころあまりに優し
あやまちや見ん

わが歌は皐月におつる雹ならん時をわすれて
さむき音かな

思へらく死ぬなどと云ふ唯ごとに代へて許さ
じその二ごころ

灯ともれば我ぞ出で行くはしきやし君とある
をば息づまるとて

衰へぬものの因果をことのほか驚かぬ子と見
ば見えぬらむ

奈落までともに落ちにき天上に翅ならぶると
異らねども

うす紅き障子のあかりそのそとに棕梠の葉の
鳴り心かなしき

二日三日君を恨みぬ七月のそよ風吹けどなぐ
さまぬほど

日記をしも初めて附けて君がことわがこと書くを哀れとぞ思ふ

ふと思ふ花市のある廣場より古き御寺の塔を見しこと

ある時のよしなしごとを恨む時もてはやすと
も聞き給ふかな

身を曲げてうすぐらがりの縁に居ぬ懺悔など
云ふこともしてまし

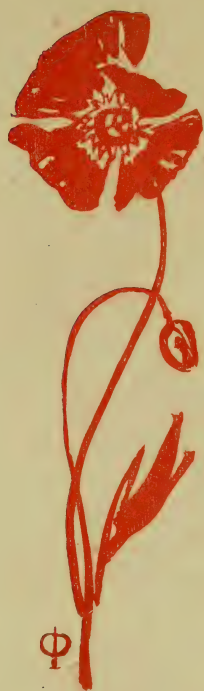
戀(こひ)すれば日(ひ)に三(み)度(たび)死(し)に三(み)度(たび)生(い)くこのおもむき
のあわただしさよ
この人(ひと)は懲(こら)し得(え)たりとことほぎぬ心(こころ)を犬(いぬ)か兎(うさぎ)
のやうに

水だまりおもちやの赤き金魚浮き雨がへる飛び日の暮れて行く

山の鳩木立の奥に動くとき灰色もいとなつかしきかな

見がたしとアカシヤの葉の射す窓をわが戀ひ
居れば夕風ぞ吹く
寒き日も二階の障子あけはなち部屋のまなか
にものを思へる

わがしつる傷と思ひしかのことをなつかしむ
日となりにけるかな

夏來れば我れ何ものも悲しかる目して見るな
り親しきがため

けふの世に歩み入りける日の初めかすかに見
ゆるゝなげしの花

あなさびし思ふことなしかく歎き文多く書く
女となりぬ

悲しくもわれ頼まれぬ性もつとある夜の夢の
後におもひき。

君と行く四谷見附の土手の草尺ほどとなり小
糠雨ふる

草踏みて草履のしめるここちさへ嬉しき夏と
なりにけるかな

こちたくも本を置きたる戸棚よりさびしさの
湧く黄昏の部屋

文書くを四五日ののち怠りぬあぢきなきかな
かかるおもひで

焼けて死ぬ身をうたがはず氷さへわれに來れ
ば火のここちしぬ

夏木立青きが上に夕雲のいく色となく下る遠かた

旅すれば國國に吹く風の香もわれ嗅ぎわけぬ哀れなるかな

病める晝起き上りたる間の中に人のあらぬは
悲しかりけり

歌詠めと馬に乗りたる使來ぬ湖めぐりかへり
來れば

巴里なる踊場の夜の話など男と語るしら砂に
居て
戀もすと願へることの中程に交ぜて語れば人
皆わらふ

わが閨のましろき麻のふすまより十二時頃の
月は出でけん

筆置きて夕立降れば見に出でぬ四谷の濠に並
ぶ柳を

あかつきや川にもまさり清らなる草の中なる
白き道かな

石竹に水遣る啞の園丁と近くわがある夕月の
もと

いとはやく虫の鳴く夜となりにけりこの二日
三日あぢきなしわれ

この夏は金蓮などの匍ふ土にすでに虫鳴くか
なしきかなや

起きいでて小鯛の網を見る頃の濱の宿屋のし
ろき電燈

わが閨の白き簾と朝の雲風に吹かれてうらが
なしけれ

扇などもてあそびつつもの思ふ秋いと近くなりにけらしな

噴水の白き石見て秋來ぬと都の少女うちもおどろく

うつくしと白き衣の肱ほめぬわが妹は姉をあがめて

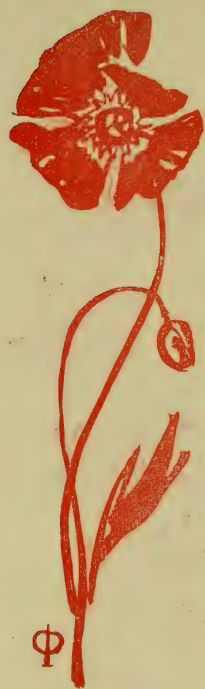
たぐひなき惡夢を見つるこの君はやがて覺めずもなりにけるかな

（以下三首前田翠溪の君を弔ひて）

この君は何をたのみし妻か子かかなしけれど
も一まきの歌

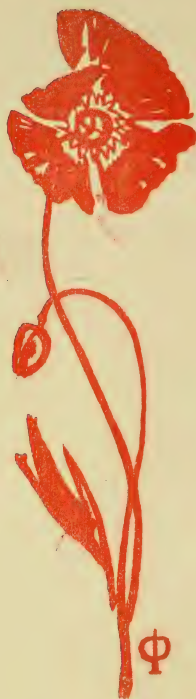
天地もかなしかりけり若き子の死にたる後の
歌におもへば

物干へ帆を見にいでしゝ七八歳の男姿のわれを
おもひぬ

うつくしき素足の冬の來りけりりちらちほらと咲
く水仙の花

亡き姉の腰のかたちと指先の爪の色のみなほ
知れりわれ

あくまでも火は慄へりと爐の前に涙ながして
思へるはわれ

あかつきの樓の下なる長き路風と小雨とだんだらに吹く

四辻の易者に行き尋ぬらくおよそこれより衰へぬかと

戀の味酢に似たりとぞひとり居は水のごとく
に味の無しとぞ

わが心の臟に通りてまだ覺めず酒も飲手もよ
きはめでたし

味氣なく赤きとんぼを見送りしある夏の日の
阪の中ほど

いのちなど更に死ぬまじかくとさへ喜べる身
はつねに思へり

われなどがかたへに寄らば涙ぐむ鳥はあらぬ
か歌ふ小鳥は

思はれておのれありしと知ることの七八年ほ
どおそかりしかな

をりふしにそぞろなることする病うとましと
なしなつかしとなす

われを見てあなめでたやと云ふもあり物を知
れるや物を知らぬや

思はると聞きてさながら戀のごと身をふるまふははづかしきかな

三年ほどもて煩らはれありし人何時より君にうち勝ちにけん

うば玉の夜に至れば泣くことを樂みにしぬ少
女なりし日

白き火の降るかわれらの戀なるか夕立の雨こ
こちよきかな

野の道の後に川のあるここちするとささやく
月に歩みて

初秋の板の廊下を歩む時山のあはひを行くここちしぬ

ひとり居に秋風吹けば悲しかり濃きくれなゐ
の窓掛のはし

わが病める小床を置きし疊よりまた寒きもの
あらじとぞ思ふ

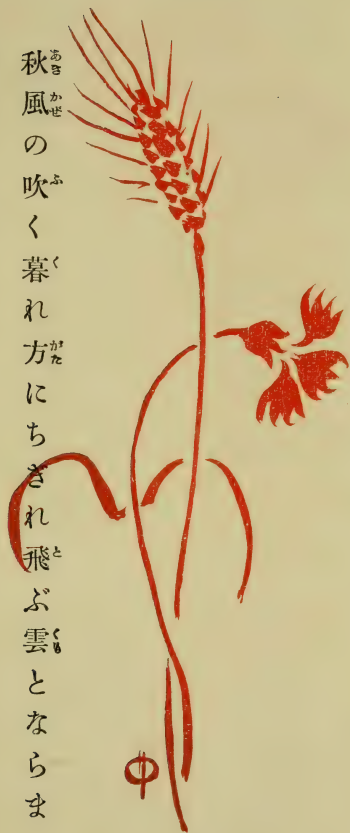
初秋の第一の日と云ふこころち確かに覺え君に
文かく
われめてぬ愛と悟をよき程に見せたるものを
秋の世として

露おきぬ物思ふ日に隣りたる味氣なき日と思ふ秋かな

露おける蓬を踏むと出づる時涙ぐみぬるくろ髪の人

秋風の吹く暮れ方にちぎれ飛ぶ雲とならまし
君をわすれて

秋來る今新しく湧きいづる水のあるらし大空
にして

わが机旅よりとある消息を二つ三つ置きて秋立ちにけり

みだらにも鷄頭の花土に咲き白犬眠り秋の風吹く

あかつきの鳥の羽音のいとはしくなりつる日
より山を降りきぬ

客人の若き男のわらひ聲まじるもよしや初秋
の風

我友の背高き人と低き人つれ立ちて來ぬ秋風
の門

わが歌ふ日となりけらしはしきやし圓葉の柳
秋風に立つ

桐の葉と松の間に秋の空少し見出でて胸騒ぐ
かな

ふるさとの海邊の秋の砂の丘くづるる雨のあ
かつきに降る

亂れ飛ぶ赤あきつより二つ三つ泣くほどのこと思ひ出でにし

夕ぐれの砂の上をば小走りに秋の風行く靜心なし

初秋の風に伴ふはなだ色見ゆれ小指のふるる
ところに

ひるつかた霧晴れたれば見下しぬ梢の下の銀
のながれを

何やかや多くの色の染みつきぬ初秋の日の女ごころに

窓に來てありのすさびにさぼてんの繪など描けども冷き日かな

衰へしものならなくにさは何ぞ遊びつかれし
一ときの身ぞ

わが戀は巖の中にありとなし見ずてあるべし
おとろへぬため

瑠璃色の空に朱を注す點一つわが脣と日と似たるかな

快く諸惡の渦の鳴るを聞け我をば問ふは海を問ふなり

聞くはよし牛の聲する蛙居て啼けば雨ふる嶋
の消息

秋くれば手に拾ひたる小石にも遠きいのちの
あるこゝちする

二つほど夏の衣を重ね著て秋來と語るうれし
きここち

古びぬとこの形なき心さへうちも侮るよから
ぬ人は

身じろがは刺さんと脅す白刃こそ秋なれ侘し
いかにしてまし

桐の葉を散るに先だち朽ちさせぬいとわりな
しや秋の長雨

やうやくに足(あし)立(た)つ程(ほど)の歩(あゆ)みざまなしつつ夢(ゆめ)の
魔(ま)の來(きた)るかな

はしきやしわが湖(みづうみ)の水(みな)口(くち)を戀(こひ)とこそ云(い)へ君(きみ)に
ながるる

君來ると南の嶋の磯に立つ夢などのなほさかんなるかな

にはかにも我が思へらく秋來る春夏あらじこの秋の後に

秋の日のうす桃、いろにかぎろへば赤とんぼと
ぶ白き蝶とぶ

悲しみぬたそがれ近くなりぬれば秋風光る海
邊の街を

ここちよき秋の朝かないとほそき金の筋見ゆ
われの心に

旅せんと人の語ると男をば捨てんと云ふと胸
に沁むかな

何やらん片手の小指しびれつと人のつぶやく
秋の晝かな

黒きもの沈める海を見て立てば心の半呆けも
こそすれ

秋の風君見ることのささはりを歎ける人が萱
の穂を見る

朝の露まばらに白き草原を前にしたるや君を
置けるや

こほろぎや夜語ることうす寒しこのおもむき
を知れる五人

罌粟色の更紗の切を手ずさびに小口より切る
秋の朝かな

はかなげにおのれ見られぬ秋來るとうすお納
戸の袷まとへば

わが好む小形の箱の三つ四つを戀しき人とも
てあそぶ夜

燈籠に火の點かずなることにより秋の悲しと
今もおもひぬ

ましろなる小さき杯われよりもきよくめでたき
少女なるべし

秋の日は淋しせつなし部屋の棚あらゆるもの
をもて飾れども
何ものか見むと思はばこともなく白刃のごと
く行き通る人

あめつちの秋(あき)はわが倚(よ)るまろ柱(ばしら)きよくつめた
きこの圓柱(まろばしら)

日(ひ)ぐらしが濡(ぬれ)色(いろ)の音(ね)を立(た)つる時(とき)湯(ゆ)ぞ浴(あ)びまほ
し石(いし)の湯(ゆ)槽(ぶね)に

静かなる根葱の色する大海の秋の色こそかな
しかりけれ

身のほとり唯だ過ぎて行く風なども慕はしと
する若き心ぞ

夜の長し寝起きに何のおもはるるかの輕卒こ
のかるはづみ

水に居る根白き蘆にあらずやと身のおもはれ
ぬ秋の朝風

天つ神猛き心をわれにより傳へしめんと思は
ざるらし

足らざりと言葉を足してもの云へば戀とひと
しき情となりぬ

やがて見ん銀杏の黄をばほのめかす秋のはじめの豆のさやかな

こし方の戀しさも皆そこなはれ憎かるものの多くなりゆく

秋來る窓と机の一尺のはざまにありてものをこそおもへ

夕の日はてなき磯の砂染めて悲しき風の波よりぞ吹く

夏より秋へ

中の巻

風に咲く紅朝顔のあはれさよ新吉原も秋の來ぬらん

やすみなきあらしの中に棲む鳥とおのれをおもふ君とあること

初秋や雁來紅のちるやうに赤とんぼとぶ夕ぐれの風

湯帷布をば重ね著したるしろき雨ふる朝方のこほろぎの聲

いつの日も同じさまなる心をば知れる二人は
泣かず別れて

かりそめの文を書く日はあはれにも君を遠し
とうち思はぬ日

君は憂し千里の遠に居ながらにわれを放たず
耳にもの云ふ

つかの間にいたくも人の衰ふることわり知り
ぬ君に別れて

子と母と淋しがれるを目の前のことと思はば
かへり來よ君

死のころも生きながら著て柩をば四月いでざ
るわれのおどろへ

海見ればまろび入るべく別れつる日のかなし
くもおもかげに立つ

そぞろにも消えもて行くがやうなりと心のさ
きを書くは誰がこと

夕ばえやはるけき國へわが夢の行くあとのごと海の染まりぬ

來よと云ひ行くべしと書きこの日より初めて夜の往にしここちす

吾妹子が心の下にかへりれりと云ふらん人を
見にか行くべき

子等おきてかへり見がちに君を追ひ海こゆる
日もさはれ疾く來よ

わがこころ下司になりぬと君なくて香油を塗
らぬ髪に思ひぬ

生れたる日のごと死ぬる日のごとく今日を思
ひてわれ旅に行く

わが泣けば露西亜少女來て肩なでぬアリヨル
號の白き船室

戀人に逢はん日遠しふるさとを見ん日知られ
ずいかがすべきぞ

京を見ん七瀬の黒き瞳をも見んこの日の後の
旅人の夢

甲板の靴音きけば淋しさも俄に戀のこころと
變る

船の上やまとの女あかつきを頼りなげにも歩む甲板

末の子が讃美歌うたふふしまはしあやにく立つる浪の音かな

金色(こんじき)の波(なみ)もも色(いろ)の波(なみ)の山(やま)うちかさなりてみづ
うみ氷(こほ)る

ここちよき胡地(こち)の皐月(さつき)の厚氷(あつごほり)夕日(ゆふひ)の花(はな)のひろ
く散(ち)りしく

犬の子と我子の顔と七つ八つかたへに並べ乳
賣る女

風吹けば右も左もはて知らぬ水の中なる蘆の
葉ひかる

蒙古犬コサックの顔たそがれの灰ばむ原を追
ひくる如し

水づきたる楊の枝もシベリヤの裸足少女もあ
はれなりけれ

楊の木穂すずき程に末見えてなびく出水の森
を今日行く

眞向ひの囚人車をば見ぬために伏目をしつつ
笛鳴れと待つ

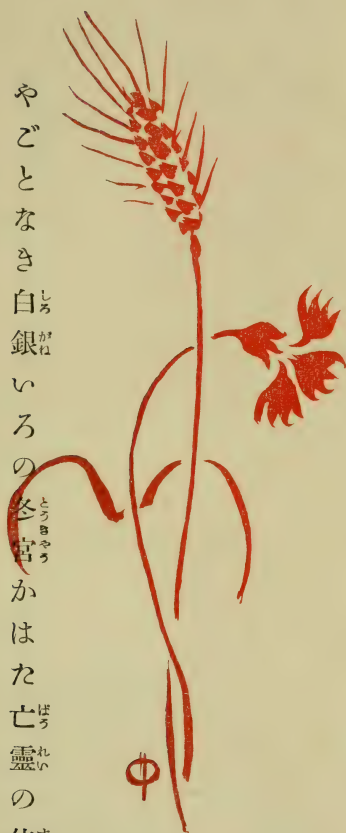
シベリヤに流されて行く囚人の中の少女が著
たるくれなゐ

かず知らず靜脈のごとうちちがひ氷る小川と
鈴蘭の花

夕ぐれは車の卓の肱ぬれぬ胡地のけしきの心ぼそさに

蒙古犬はた驛の人六人程ありと記すも旅はけうとし

やごとなき白銀いろの冬宮かはた亡靈の住める家居か。

よこしまに斬らるるここちして入りぬ聖者を描ける王宮の門

三千里わが戀人のかたはらに柳の絮の散る日
に來る
下に住む西班牙の子がピヤノをば叩けば起き
てくろ髮を梳く

初夏やブロンドの髪くろき髪ざれごとを云ふ
石のきざはし

四つ辻の薔薇を積みたる車よりよき香ちるな
り初夏の雨

うすものが芝居の廊を歩む時オオトモビルに
隠れ行く時

くれなゐの杯に入りあな戀し嬉しなど云ふ細
き麥わら

噴水が風に散るなり君が被るましろき絹の風
に散るなり

門入りて敷石の道いとながし君と寝んとて夜
毎かへれば

翅ある子日曜の日はあまた居ぬリユクサンブ
ルの花の小みちに
君達の尺の帆舟のあやふけれリユクサンブル
の噴水のもと

君と行くノオトル・ダムの塔ばかり薄桃色にの
こる夕ぐれ

だあだあと聲の尻ひく歌うたひ窓下に來ぬも
のをおもへば

ああ皐月佛蘭西の野は火の色す君も雛罌粟わ
れも雛罌粟

セエヌ川よき船どもにうち向ひ橡の並木の青
き呼吸吹く

室の中に素足してある姿など見知れる人は來
ても見よかし

泣きて云ふあまりに早くわれの來し天國なれ
ば心おちゐず

またもなく夜の黒地はなまめかし上に灯をおきたをやめを置く

何れぞややつれ姿は旅人のつね戀人は若やぐがつね

大かがみ怪しくわれの香はしとおもほゆるか
な灯の匂ふまへ

うす青く夜の明け行くうす青くメルルの鳥の
聲の明け行く

森の奥薔薇の花のあるかぎり水色の羅を被く
たそがれ

木によりて匂へる薔薇秋山の蔦にまさりては
かなき薔薇

物賣にわれもならまし初夏のシャンゼリゼエ
の青き木のもと

わが小舟雨に濡れつつ白鳥とうち並び行く二
時がほど

生きて世にまた見んことの難からば悲しから
まし暮れゆく巴里

旅びとの涙なれどもなごやかに流るるものか
夜の巴里に

馬車にある芝居がへりの夏の夜身の程よりは
くやしからざり

柵に來て番附賣がもの言ひぬ芝居の前の夏の
夜の月

寺へ行く薔薇いろの頬とすれちがふ石阪道の
夏の朝かぜ

（以下十四首佛蘭西南部のツウルにて）

雛罌粟と矢車草とそよ風と田舎少女のしろき
紗の帽

うす白き古塔を額に仰ぐ時いにしへの世は知
らねどよろし

日の夕ルイ王の子の眠るとて悲しき鐘を打つ
カセドラル

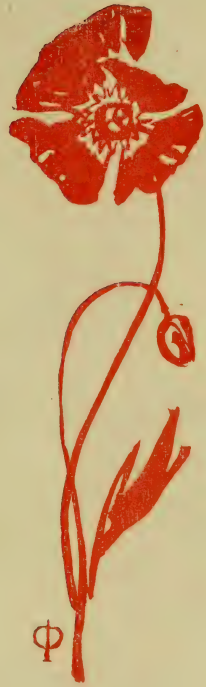
君とわれロアルの橋を渡る時白楊の香の川風ぞ吹く

美くしき西班牙女よとあな無禮人の妻をばかく呼ぶは誰

あえかなる踊子來りわが前に杯をあぐ灯の海
の底

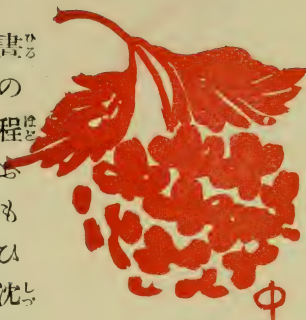
夏川のセエルに臨むよき酒場フックの莊の雛
罌粟の花

「ひたむきに左に走れ御者」と呼ぶ夫人の聲も山
の夜に好し

月さしぬロアルの河の水上の夫人ピニヨレが
石の山荘

饗する家の少女が薪をば捜す岩屋のしろき蠟の灯
歌うたひ舞ふ少女をば石壁にわななきうつす蠟の燭かな

ひなげしを摘みて散らせる石の卓血やこぼれ
しとふと心冷ゆ

前に引くとばりの如く淺みどりアカシヤの木
のゆらぐ夕ぐれ

晝の程おもひ沈むも許すべし夜は人並に氣の
狂へかし

さま悪しくいたくも物を思ふかな東の嶋に子
等を置くとて

しら波の沫のやうなる眞珠の輪頸に掛くれば
涼風ぞ吹く

長椅子に藤むらさきの靴足袋の艶に横たふ夜
明ごろかな

わが背子は金の飾りの上沓をまひなひにしぬ
夜遊びのあと

あとつけて走る船こそをかしけれ君とわれと
の川逍遙に

わが馬車の外に何ある淺みどりプラタンの葉
のあかつきの風

巴里なるオペラの前の大海にわれもただよふ
夏の夕ぐれ

ふらんすの八月の朝涼しくも靴くくとなる石だたみかな

ましろなる孔雀の少女卓に來て君と物云ふ憎しめでたし

サッフォオの啜り泣をば後にして君が手により降るきざはし

西ひがしやうやく知れる心より帷を揚げぬ夕雲のため

目の前に霧のくだるをおもふかな羅をかづき
たる君ぞ來ませる

あちこちに焔しきりに燃ゆと見ゆあらず手組
める男と女

網戸引くロオヂュの中に席とれる公爵の子の
夜のうすもの

はだへよりはだへに吹きてなまめかし芝居の
廊の夏のそよ風

容易くもめでたきものを集めたり序幕の前の
時のたふとさ

こころよき淵のごとかり身を投げん舞臺の君
の眸のくまどり

髪長き新男なるエルナニのいのちを欲しと角
吹く角吹く
海峡に灰を撒きたる星ぐもり我を載せたる船
流れゆく

ひんがしのはなれ小島に子をおきて泣く女ゆゑさむき船かな

海峡の燈臺の灯は明滅すわがおちつかぬ旅のこころに……

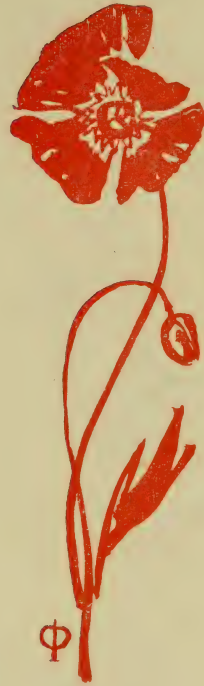
ゆゆしかる身の果としも思はねど大海に寝て
泣く夜となりぬ

海峡の夜風に聞けば旅人のざれたる聲もかな
しきものを

何れぞや我かたはらに子の無きと子のかたはらに母のあらぬと

星あまた旅の女をとりかこみ寒き息しぬ船を下れば

僧俗のさだかに見えず讃美歌す大英國の君王
の寺

王宮のまへの廣場を七かへり花と女の馬車ぞ
輪を描く

黒毛帽金絲の紐に頤くくるわかき近衛に物言ひてまし

大宮も白鳥の羽も水色に見ゆる夕となりにけるかな

白塔の窓のあかりは烏羽玉のくらがりよりも
かなしかりけれ

（倫敦塔にて）

さし過ぎし目にあぢきなしいぎりすは上白み
たる桃色の國

埃及の上著を著たる歌女の後ろを歩み灯の國
に行く

ジプシイの指鳴る時にくろ髪は膝をはなれて
杯をとる

朝にはこの都賞め夕には去なんと泣くも旅の
こころぞ

象を降り駱駝を降りて母と喚びその一人だに
走りこよかし

花を嗅ぎしげる青木の蔭ふめば夕露の如もの
の泣かるる

若やかに青き木のもと此處ゆかんまた新しき
夢の路ぞと

手を伸す水の少女か一むらの濃き綠より睡蓮の咲く

戀したる身のおとろへに血を假せよいく溫室の南國の花

水に焚く夏の香爐のけぶりたるうす紫の睡蓮の花

青芝の海を渡りで毛欅の木の島にあるなり人とそよかぜ

戀するや遠き國をば思へるやこのたそがれの
睡蓮の花

さびしくも後ろの方の古き城うす黄に光る森
の道かな

しづかなる森に向ひて丘めぐりきざはしのご
と花薔薇さく

わがあるは落ちたる底か天上かさしも思はれ
かくしも思ふ

戀するにむつかしきこと何のこる三千里さへ
一人にて來し

衰へに目まひ覺えしその朝のその夕にはくれ
なゐを著る

わが宿のアカシャの木のうしろなる赤き畫室
の暮れ殘るかな

わが思ひいとせまぐるしふるさとを離れず君
と阿子をはなれず

セエヌ川船上る時見馴れたる夕の橋の暗きむ
らさき

神のごと車を驅りてわれら行く眠りに行くは
天ならねども

君とわれ高きに上り橋あまたかかれる水を覗
く夕ぐれ

おのづから大路の白き敷石に心さそはれ夕あ
るきする

率ても行く男の持てる細杖が魔法のごとく街
の其處此處、

すばしこき車の馬といたはりぬ君があるなる
森にいたれば

ことことと敷石を踏むひづめこそ夜の世界の
匂ひならまし

わが閨の眞紅のあかりそれさへも髪を摑むと
病めばおそれぬ

室の中に君が匂ひのただよふと酔ひ癡れをれ
ば夕となりぬ

雨に行く匂ひと色のふりそそぐマロニエの木
の若葉する路

午前二時まだ廊の灯の消ぬ前にかへり來るこ
と三日四日つづく

思はると涙を流したため息をよろこびにつく樂し
みにつく

石として据ゑられしごと我れありぬ日の美く
しき朝のきざはし
酒場の地獄の給仕かのこともその日の業も見
透かして云ふ

水いろの木の下の椅子うつくしき指もて叩き
來よと喚ぶ人

哀れなる香こそただよへ雛罌粟に藍をにじま
せ野邊の暮るれば

澄める水ほのほ浮けたりこれや何ロダンの作る男と女

鳩となり遠きところへ汝がこころ飛び行きけんと手をとりて聞く

初夏の野に一日居ぬ君とわれ緑と金にかくまはれつつ

一人にて朝はあらん園のうち君がさがしに來たまはんまで

繪の中の飛ぶ天女さへ仇なすとよきは憎みぬ
ありのすさびに

ジプシイの見世物小屋のとりおくれ祭の後の
並木とならぶ

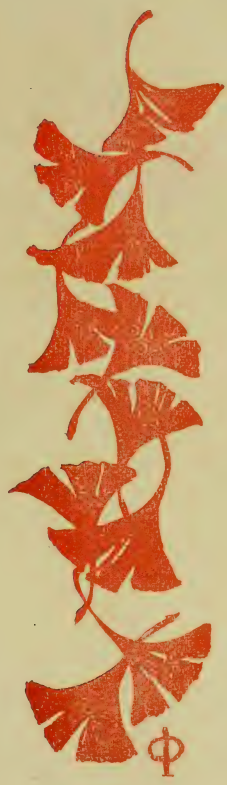
箱車やからを載せて見世物師瘦馬ひとつ附け

しかなしさ

ありふれし戀ざめよりも哀れなり街の祭のあ

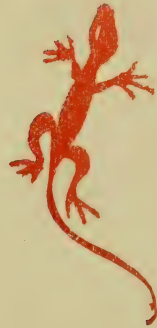
くる日の風

木の蔭に眠りの足らね御者の顔ひとつ見ゆる
もなまめかしけれ

ふつつかに鳥のやうなる裳をひろげ花屋の媼
が店開くる頃

寒からんモンマルトルの女より文受くる子も
秋の朝は

普請場のかこひに貼れるお納戸の廣告繪など
さむき朝かな

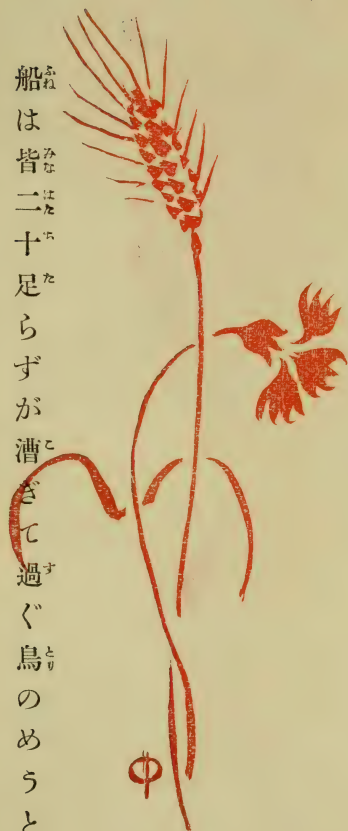
秋風は凱旋門をわらひにか泣きにか來る八つ
の辻より

かへりみぬシャンゼリゼエのうづだかき並木
の持てる葡萄色の秋

自動車の後ろに高き噴水の立つと思ふがここちよきかな

森に入る白き大道わかき日の戀の心のおもむく如し

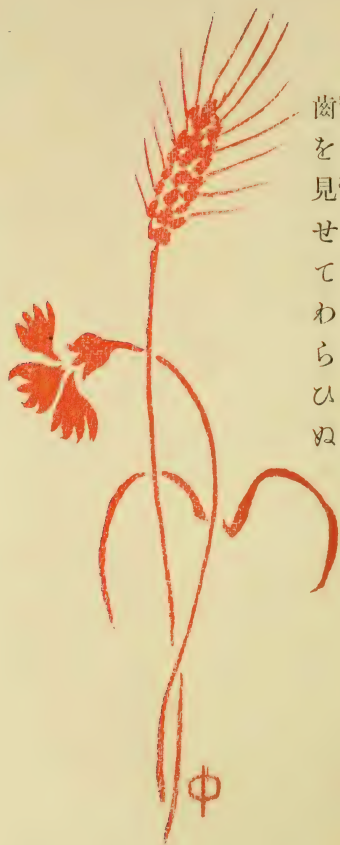
ひろくして盡きんともせず森の道涙するまで
嫉ましきまで

松の幹泣ける女の目の色すその島かこむ初秋
の水

船は皆二十足らずが漕ぎて過ぐ鳥のめうとの
浮けるあひだを

浮床を靴のたたけば白き鳥ものいひに來ぬ何
をやらまし

船待の木の腰かけに鳥の毛の帽子がものをおもふ朝かな

手のひらに小雨かかると云ふことにしら玉の歯を見せてわらひぬ

白鳥をもてあそぶため手を打ちぬはた嬉しさ
のおもひでのため

傘あけてわれかしづきぬ島の人船を上れば銀
の雨ふる

しぐれきぬ肱掛椅子の十歩まへ赤き花葡ふァ
カシャの木に
離れたるいちじくの屋根彼處なる男女も雨を
わぶらん

秋の日の泉の波を染め分けぬ雨と風とが青と
白とに

ももいろと臙脂の輪をば花草の置きたる庭も
秋の雨ふる

美くしき女ばかりの船めぐり追従をする白鳥のむれ

ロン・シャンの競馬の家は盲ひたる少女の如く草踏みて立つ

海に似る森をはなれて白楊のまばらに立てる
秋の野に出づ

白楊のめでたきことをはてもなく思へる時の
秋の風かな

秋の風支那すだれよりセエヌをば覗ける君の
薄紺の裾

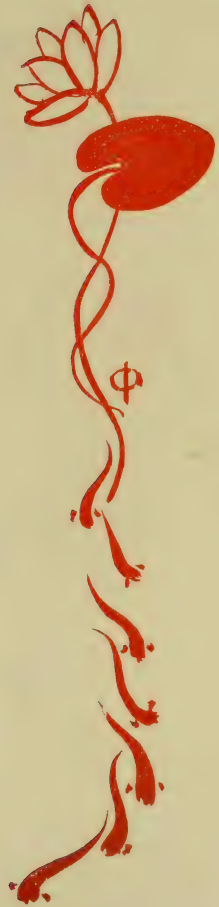
樓に見るセエヌの底の秋の空わがうれひより
冷たかりけれ

馬車ひとつやとひそこなひ背負ふこともとより知らずなめげなるかな

川に沿ふ水いろの茶屋白き茶屋ヸオロンの窓
ピアノ鳴る窓

曲りたる石のきざはし秋風のよろめきて吹く石のきざはし

（以下二十首フオンテンブロウにて）

唯だあるは金の王座と水晶の曇れる器たび人のわれ

いにしへの君王の閨金色の枕にかよふ秋の初
かぜ

うるはしきアンリイ四世の踊場にふたり三人
の低き靴音。

水晶の燈籠のもと細き手を王に與へて人あゆみけん

年の名も王達の名も忘れずにいふ殿守の寒き聲かな

大宮のうしろの水の石垣に桃色を著て肱かくる人

大宮のゴブラン織に秋風の通へば旅のおのれらも泣く

王后はいまさぬ跡もめでたかり黄金のとばり
しら玉の卓
そのかみの后の調度うす紅に光れる殿の窓あ
かりかな

雲きたり濡れて遊びぬ白楊の木立のなかの圓
き水盤

大宮の石のきざはし冷たかり蹈む旅人の秋の
こころに

わが髪もうす紫にしづくしぬ毛欅の木立を風
のすぐれば

馬車ひとつ蹄音たてて過ぎ去れば毛欅のあか
りの青くひろがる

下草にうす桃色のかげ引きぬ白樺の木とわれ
の姿と

金を刷り紫を撒く風ありてあかるき秋の森の
道かな

下草の赤紫にしら樺のむらむら立ちてうらが
なしけれ

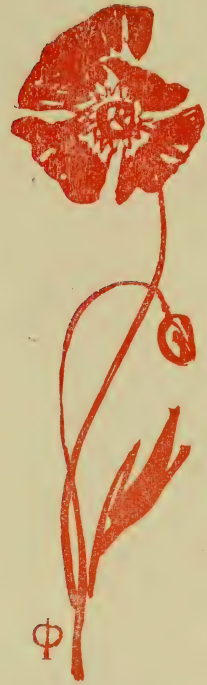
浪のごと白楊立ちぬ見るかぎり遠く青める森
の海かな

身のほそる我が愁にも似て清し秋の森なるし
ら樺の枝

たそがれは森よりわれを追ふごとし君と踏む
べき街の灯のため

海底の砂に横たふ魚の如身の衰へて旅寝するかな

（以下十四首ミユンヘンにて）

眠ることなくて我見る悪しき夢うとましき夢かずまさり行く

欧羅巴の光の中を行きながら飽くこと知らで
泣く女われ

青白き天つ日一つわが上を照して寒し外にも
のなし

子をすてて君に來りしその日より物狂ほしくなりにけるかな

わが心よし狂ふとも戀人よ君が口より教へたまふな

目の白く盲ひたる群の爭ひて走るがごときイザル川かな

イザル川白き濁りに渡したる長き橋よりあふぐ夕雲

いかばかりもの思ふらん君が手にわが手はあれど倒れんとしぬ

青き枝こがねの繡をおける枝朱を盛れる枝雨のながるる

其處此處に紅葉の枝を隱したる木深き森の秋
のたはぶれ

戀人と世界を歩む旅にしてなどわれ一人さび
しかるらん

わが夫子よ君も物憂しかかること云ひはなつまで狂ほしきかな

わが船は白き墓場となりにけり港の端を君が踏む時

さびしげに海に浮べりわが心エトナの火をば
猶いだけども

佛蘭西に君をのこして我が船の出づる湊の秋
の灰色

ゆく先かはたこし方かわが心引くなるものの

ありか知らずも

飛魚は赤とんぼほど浪こすと云ふ話など疾く

語らまし

秋の海われは悲しき喪の國をさして去ぬなり
大船にして

秋くれば根も枯れぬらん雛罌粟は夜な夜な船
の夢に立てども

南國の木の實を吸へば涙おつ昨日の戀の味に似たれば

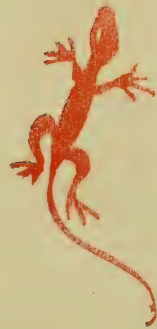
四十度の傾斜に惱むわが船に馬太傳讀む尼のうとまし

船室の二十四時に間なく聞く浪音よりも盡き
ぬ戀する

この人はなにを商ふ戀びとの紅き涙としろき
涙と

（コロンボにて玉賣の土人に）

云ひがたきわりなき涙おつるなり日向の灘の
青き潮に
夜明くれば船ぞ港に入ると云ふ戀の心は行方
知らずも

船に寝るいやはての夜のおもひなど哀れなり
けり女ごころに

わが船の著くよろこびに父母のよみがへり來
ばうれしからまし

ふるさとの和泉の山を内海の霧の中よりのぞ
くあけがた

泣くは誰れ和田の岬の見ゆるとて滿船の人ど
よむ中より

四十日ほど寝くたれ髪の我がありしうす水色
の船室を出づ

めでたかるわが百年の中頃に四十日ありける
しろき船室

涙おつかの登天のここちせしいでたちの日に
似ざるものから

水いろの船にかくろひ黒髪の人かへりきぬ捨
てられにけん

あはれにも心もとなき遠方にいのちをおける
汝が母かへる

味氣なく心みだれぬわが手のみ七人の子を撫
づる日に逢ひ

マルセエユいとあわてたるここちして相乗し
たるいやはての馬車

別れ來し港の朝のけしきなど片はし語り涙な
がるる

子を思ふ不淨の涙身を流れわれ一人のみ天國
を墜つ

家に入り十日になりぬ何せしぞ今日も昨日も
はかなさばかり

海こえて戀しき君を見にゆくと人の語れば涙
こぼるる

一人居て身のうらめしさまさる時わが黒髪に
蛇の生るる

しろがねの甕(もたひ)にささんわが愁(うれひ)銀杏(いてふ)の色(いろ)の三十(みそ)
路(ち)の愁(うれひ)

心(こゝろ)より見(み)じ聞(き)かじとて歸(かへ)りこし國(くに)ならなくに
事(こと)のものうき

阿子と云ふ草やはらかに生ひしげる園生にま
ろび泣寝すわれは

子を思ひ一人かへるとほめられぬ苦しきこと
を賞め給ふかな

今さらに我れくやしくも七人の子の母として
品のさだまる

ああおのれ末のこの世にふさはざる火の戀を
して短命に死ぬ

わがいのち男の戀のそれよりも危きものとか
ねて思へり

歸る日をさしも急がず船に居しその日のまま
のむなしき心

心より外にさ云へど已みがたき親のおもひを
われもしにけん

母は今汝をひと目見て足りたれば心かはりぬ
せんすべもなし

君見んともてる願ひのかなはぬを病と云ふも
ふるめかしけれ

けうとしやおろそかならぬ戀すると今日知る
ごとく人の云ふこと

身は瘦せぬしら刃の如き別離をばわがおもひ
出の中に見るたび

夏より秋へ

下の巻

一

山の動く日來る、
かく云へど人われを信ぜじ。
山は姑く眠りしのみ、
その昔彼等皆火に燃えて動きしものを。
されど、そは信ぜずともよし、
人よ、ああ、唯これを信ぜよ、
すべて眠りし女今ぞ目覺めて動くなる。

II

一人稱にてのみ物書かばや、
われはさびしき片隅の女ぞ。
一人稱にてのみ物書かばや、
われは、われは。

III

額にも、肩にも、
わが髪ぞほつるる。
しをたれて湯瀧に打たるるこころもち……
ほつとつく溜息は火の如く且つ狂ほし。
かかること知らぬ男
われを褒め、やがてまた譏るらん。

IV

われは愛づ、新しき薄手の玻璃の鉢を。
水もこれに湛ふれば涙と流れ、
花もこれに投げ入るれば火とぞ燃ゆる。
恐るるは、若し粗忽なる男の手に砕け去らば――
素焼の土器よりも更に脆く、かよわく……

V

青く、且つ白く、
剃刀の刄のこころよきかな。
暑き草いきれにきりぎりす啼き、
ハモニカを近所の下宿にて吹くは懶けれども、
わが油じみし櫛笥の底をかき探れば、
陸奥紙に包まれし細身の剃刀こそ出づるなれ。

VI

にがきか、からきか、煙草の味は。
煙草の味は云ひがたし。
甘しと云はば、粗忽人、
砂糖の如しとや思はん。
われは近頃煙草を喫み習へど、
喫むことを人に秘めぬ。
蔭口に男に似ると云はるるはよし、
唯おそる、かの粗忽人こそいと多なれ。

VII

「鞭を忘るな」と
ヴアラッストラは云ひけり。
女こそ牛なれ、また羊なれ、
附け足して我ぞ云はまし、
「野に放てよ。」

VIII

わが祖母の母は、わが知らぬ人なれど、
すべてに華奢を好みしとよ。
水晶の珠數にも倦き、珊瑚の珠數にも倦き、
この青玉の珠數を爪繰りしとよ。
我はこの青玉の珠數を解きほぐして、
貧しさに、與ふべき玩具なきまま、
一つ一つわが兒等の手にぞ置くなる。

IX

わが歌の短ければ、
言葉を省くと人おもへり。
わが歌に省くべきもの無し、
また何を附け足さん。
わが心は魚ならねば鰓を有たず、
ただ一息にこそ一切を歌ふなれ。

X

すいつちよよ、すいつちよよ、
初秋の小さき篳篥を吹くすいつちよよ、
汝が聲に青き蚊帳は更に青し。
すいつちよよ、なぜに聲をば途切らすぞ、
初秋の夜の蚊帳は水銀の如く冷たきを……
すいつちよよ、すいつちよよ。

XI

油蟬のじじ、じじと啼くは、
アルボオス石鹸の泡なり、
慳貪なる男の方形に開く大口なり、
手握みの二錢銅貨なり、
いつの世もざらにある藝術の批評なり……

XII

夏の夜のどしや降りの雨……
わが家は泥田の底となるらん。
柱みな草の如く撓み、
そを傳ふ雨漏の水は蛇の如し。
寢汗の香……かなしさよ、よわき子の齒ぎしり……
青き蚊帳は蛙の喉の如く脹れ、
肩なる髮は鹿子茱の如く戰ぐ。
この中に青白きわが顏こそ
芥に流れて寄れる月見草なれ。

XIII

唯だ「人」と、若くは「我」とのみ名告るぞよき。
雑多の形容詞を附け足さんとするは誰れぞ。
大と云ひ、小と云ひ、善と云ひ、悪と云ひ………
そは事を好む子供の所為なり。
何物をも附け足さぬは、
やがて一切を備へし故なるを。

XIV

相共にその自らの力を試さぬ人と行かじ。
彼等の心には隙あり、油斷あり。
よしもなき事ども——善惡と云ふ事どもを思へるよ。

XV

過去はたとひ青き、酸き、充たざる、如何にありしとも、
今は甘きか、匂はしきか、
今は舌を刺す力あるか、無きか。
君よ、今の役に立たぬ果實を摘む勿れ。

XVI

商人等の催せる饗宴に、
我の一人まじれるは奇異ならん。
我の周圍は目にて滿ちぬ。
商人等よ、晩餐を振舞へるは君達なれど、
我の食ふは猶我の舌の味ふなり。
されど商人等よ、おのおの其最近の所得に就いて誇りかに語れ、
我はさる事をも聽くをよろこぶ。

XVII

行くほどに、街は暮れて、明るき月夜の海となり、
人は魚の如く跳り、ともし火は波の如く泡立つ。
地に落つる人影にわが影の入りまじる如く、
われは他の遊ぶを遊ぶ……
われは知る、つひに一人なり。

XVIII

かの歯車は断間なく動けり、
静かなるまでいと忙しく動けり、
かれに空しき言葉なし、
かれは彼の中に一切を刻むやらん。

XIX

すべて異性の手より受取るは、
溫かく、やさしく、匂はしく、派手に、
胸の血のわりなくもときめくよ。
女のみありて、
女の手より女の手へ渡る物のうら淋しく、
おなじ茶人の間に受渡す言葉の如く、寒げに質素な
るかな。
このゆゑに我は女の味方ならず、
このゆゑに我は裏切らぬ男を嫌ふ。

かの袴(はかま)のみけばけばしくて、淋(さび)しかる女(をんな)の群(むれ)よ、
かの傷(きず)なき紳士(しんし)よ。

XX

わが心は油よ、
より多く火をば好めど、
水に附き流るるも是非なや。

XXI

鞣さざる象皮の如く、
受精せざる卵の如く、
胎を出でて早くも老いし顏する駱駝の子の如く、
目を過るものの凡そ此三色を出でず。
彼等は豐葦原の瑞穗の國の一流の人人なり。

XXII

白蟻の仔蟲こそ慘しけれ。
職蟲の勝手なる刺激に、
兵蟲とも、生殖蟲とも、職蟲とも、
即ち變へらるるなり。
職蟲の其勝手なる無殘なる刺激は
陋劣にも食物をもてす。
さて又其等各種の蟲の多きに過ぐれば、
職蟲はやがて刺し殺して食ふとよ。

XXIII

晶子、ヴアラツストラを一日一夜に讀み終り、
その曉、ほつれし髮を搔上げて呟きぬ、
『辭の過ぎたるかな』と。
しかも、晶子の動悸は羅を透して慄へ、
その全身の汗は產の夜の如くなりき。

さて十日經たり。
晶子は青ざめて胃弱の人の如く、
この十日、良人と多く語らず、我子等を抱かず。

晶子の幻に見るは、ヴアラッストラの黒き巨像の上げたる右の手なり。

XXIV

ただ一人ある日よりも、
大勢と居る席で、
わが姿こそしよんぼりと細りやつるる。
常は湯のやうに湧く涙も
かかる日は凍りぬらん。
立枠模様の水淺葱、はでな湯帷布を著たれども、
わが姿人にまじればうら淋しや。

XXV

わが家の八月の日の午後、
庭の盥に子供等の飼ふ赤目高は
生湯の水に浮上り、
琺瑯色の日光に、
焼針の頭を並べて呼吸をする。
その上にモザイク形の影を映す
静かに大きな金網……
木の葉は皆膏汗に光り、
隣の肥えた白い猫は木の根に眠つた儘、死ぬやらん。

わがする幅廣の帶こそ大蛇なれ、
じりじりと、じりじりと巻きしむる……

XXVI

夜あけに降つた夕立が
庭に流した白い砂、
こなひだ見て來た岩代の
摺上川がおもはれる。
砂に埋れて顏を出す
濡れた黃色の月見草、
あれ、あの花が憎いほど
わたしの心をさし覗き……
おもひなしかは知らねども、

やつれたわたしを引立たす。

XXVII

青いすいつちよよ、
青い蚊帳に來て啼く青いすいつちよよ。
青いすいつちよの心では
戀せぬ昔のわたしと思ふらん、
さびしい、さびしい女と思ふらん。
思へば、和泉の國にて聞いた其聲も、
今聞く聲も變りなく、
きさくな、世づかぬ小娘の青いすいつちよよ。

青いすいつちよよ、
青いすいつちよは何ぜ啼きさして黙るぞ。
わたしの外の聞き慣れぬ男の氣息に羞らふか。
やつれの見えるわたしの頬、
わたしの髪をじつと見て、虫の心も咽んだか。

青いすいつちよよ、
何も歎くな、驚くな、わたしは凡て幸福だ……
いざ、今日此頃を語りなん、
來てとまれ、

わたしの左の白い腕を借さうほどに。

XXVIII

善しと人の褒むる物事の裏に、
僞と慢心と嫉妬と潜む、
そは醜き不純の光なり。
我は身を投げてあらゆる罪惡と悔恨と恥辱とに抱かれまし、
その隱れて徐ろにあらはるるものほど、
遠空の星の永久に輝く如く、
純金の錆びず、金剛石の透きとほるが如く、
いつ見ても活活として美くしく好ましきかな。
あだし人のそを罵るも素直に罵るなれば亦美くし。

XXIX

彩色硝子の高き窓を半ひらき、
引きしぼりたる印度更紗の窓掛の下に、
下町の煙突の煤煙を見下しつつ、
小やかな輕き朝飯のあとに、若き貴女の彈くピヤノの一曲‥
東京の二月の空は曇れども、
若き貴女の心に綠さす
明るき若葉の夏の色、戀の色、生の色………

XXX

過ぎこし方を思へば空わたる月の如く、
流るる星の如くなりき。
行方定めぬ身をば歎かじ、
わが道は明日も弧を描かん、
踊りつつ行かん、
曳くひかり水色の長き裳の如くならん。

XXXI

藝術はわれを此處まで導きぬ。
今こそ云はめ、
われ藝術を彼處に伴ひ行かまし、
より物質的に、より藝術的なる處へと。

XXXII

われは軛となりて挽かれ、
駿足の馬となりて挽き、
車となりてわれを運ぶ。
わが名は「眞實」なれど、
「力」と呼ぶこそすべてなれ。

XXXIII

まはれ、まはれ、走馬燈……
走馬燈は幾たびまはればとて、
曲もなき、同じふやけし馬の繪なれど、
猶まはれ、まはれ――まはらぬは淋しきを。
桂氏の馬は西園寺氏の馬に
今こそまはりゆくなれ――まはれ、まはれ。

XXXIV

米の値の例なくも昂りければ、
わが貧しき十人の家族は麥を食ふ。
子供等は麥を嫌ひて
「お米の御飯を」と叫べり。
麥を粟に、また稗に改むれど、
なほ子供等は「お米の御飯を」と叫べり。
子供等を何と叱らん、
母も年若くして心には米を好めば……

「部下の遺族をして窮する者無からしめ給はんことを。
我が念頭に懸るもの之あるのみ」と、
佐久間大尉の遺書を思ひて今更に心咽ばるる。

XXXV

葡萄いろの秋の空を仰げば、
初めて斯かるみづみづしき空を見たる心地す。
われ今日まで何をしてありけん、
厨と書齋に在りしことの寂しきを知らざりしかな。
わが心今更の如く解かれたるを感ず。

葡萄いろの秋の空は露にうるほふ、
斯かる日にあはれ田舍へ行かまし。
そこにて掘りたての里芋を煮る吊鍋の湯氣を嗅ぎ、

そこにて尻尾ふる百舌の甲高なる叫びを聞き、
そこにて刈稲を積み歸る牛と馬とを眺め、
そこにて鳥兜と野菊と赤き蓼とを摘まばや。

葡萄いろの秋の空はまた田舎の朝によろし。
砂川の板橋の上に片われ月しろく殘り、
「川魚御料理」の家は未だ寝たれど、
百姓屋の軒毎に立つる朝食の煙は
街道の丈高き欅の並木に迷ひ、

籾する石臼の音近所隣にごろごろとゆるぎ初むれば、

「とつちやん」と小き末娘に呼ばれて、門先の井戸の許に鎌磨ぐ老爺もあり。

かかる時、たとへば澁谷の道玄坂の如く、突きあたりて曲る、行手の見えざる廣き坂を、今結びし藁鞋の紐の切目すがすがしく、男も女も脚絆して足早に上りゆく旅姿こそをかしからめ。

葡萄いろの秋の空の、されど又さびしきよ。
われを父母ありし故郷の幼心に返し、
戀しらぬ素直なる處女の如くにし、
中六番町の庭の無花果の木の下、
手を組みて云ひ知らぬ淡き愁ひに立たしめぬ、
おそらくは此朝の無花果のしづくよ、すべて涙
ならん。

XXXVI

とん、とん、とんと足拍子、
洞を踏むよな足拍子……
つひ嬉しさに、秋の日の
長い廊下を走つたが、
何處をどう行き、どう探し、
何うして探つたか覺えねど、
わたしの袂に入つてた、
きちがひ茄子と笑ひ茸……
わたしは夢を見て居るか、

もう氣ちがひになつたのか、
あれ、あれ、四方が火になつた。
わたしはくくと笑ひ崩れる。

XXXVII

茜と云ふ草の葉を搾つて
臙脂はいつでも採るとばかり、
わたしは今日まで思つてた。
鑛物からもよい臙脂は採れるのに。
そんな事はどうでもよい、
わたしは大事の大事を忘れてた、
わたしの夢からも、
こんなに眞赤な臙脂が採れる。

XXXVIII

「秋」は薄手のさかづきか、
ちんからりんと杯洗に觸れて沈むよな虫が啼く。
「秋」は妹の洋傘か、
きやしな細柄の玉の上、明るいクリイム色の日があたる。

さてまた「秋」は二十二三の今様づくり、
青みを帯びたお納戸の著丈すらりと……
白茶地に金絲の多い式紙がた、唐織の帯もまばゆく……
園遊會の片隅のいたや紅葉の蔭を行き、

少し伏目にまつ白な菊の花壇をじつと見る。
それから、後ろのわたしと顔を見合せて、
「まあいい所で」と走り寄り、
「どうしてそんなにお痩せだ」と、
十歳の時別れた姉の様な物言ひは、
優しい、うれしい秋だこと。

XXXIX

女、三越の賣り出しに行きて、
寄切の前にのみひと日ありき。
歸りきて、かくと云へば、
男はひとり棋盤に向ひて
五目並のみ稽古してありしと云ふ。
（零と零と合せたる今日の日の空しさよ。）
さて男は疲れて默し、又語らず、
女も終に買物を語らざりき。
その買ひて歸れるは唯だ高浪織の帶の片側に過ぎざれど……

XL

それは細き麥稈、
しやぼん玉を吹くによけれど、竿とはし難し、
まして、まして柱とは。
されど麥稈も束として火を點くれば、
ゆゆしくも家を燒く。
わが幼兒は賢し、
束とはせず、しやぼん玉を吹いて歩くよ。

XLI

退船の銅鑼いま鳴り渡り、
見送の人〻君を圍めり。
君は忙しげに人〻と手を握る。
われは泣かんとはづむ心の毬を辛くも抑へ、
人〻の中を脫けて小走りに、
うしろの甲板に隱るれば、
波より射返す白きひかり墓地の如し。

この二三分……四五分の淋しさ、

われ一人のけ者の如し、
君と人々とのみ笑ひさざめく。
恐らく遠く行く旅の身は君ならで、
この淋しき、淋しき我ならん。

退船の銅鑼は又ひびく。
惨酷に、されど又痛快に、
わが一人とり殘されし冷たき心を苛むその銅鑼……

込み合へる人々に促され、押され、慰められ、
我は力なき毬の如くふらふらと船を下る。

乗り移りし小蒸汽より見上ぐれば、
今更に熱田丸の船梯子の高さよ。
ああ君と我とは早くも千里萬里の差……

わが小蒸汽は堪へかねし如く終に啜り泣く……
一聲、二聲……
千百の悲鳴をほつと吐息に換へ、
「ああなつかしや」と、心細きわが魂の、
臨終の念の如くに打洩す熱き涙の白金の幾滴……
君が船は無言のままに港を出づ。

人人は叫びかはせど、
かなたに立てる君と此處に坐れる我とは、
靜かに、靜かに、二つの石像の如く別れゆく……

（一九一一年十一月十一日神戸にて）

XLII

わが夫の君海に泛びて去りしより、
わが見る夜毎の夢、はた、すべて海に泛ぶ。
或夜は黒きわたつみの上、
片手に亂るる裾をおさへて、素足のまま、
君が大船の舳先に立ち、
白き蠟燭の銀の光を高くさしかざせば、
滴る蠟のしづく涙と共に散りて、
黄なる睡蓮の花となり、又しろき鱗の魚となりぬ。
かかる夢見しは覺めたる後も清清し。

されど、又かなしきは或夜の夢なりき。
君が大船の窓の火ややに消えゆき、
唯だ一つ殘れる最後の薄き光に、
われ外より硝子ごしにさし覗けば、
われならぬ面やつれせしわが影既に内にありて、
あはれ君が棺の前にさめざめと泣き伏すなり。
「われをも内に入れ給へ」と叫べど、
外は波風の音おどろしく、
内はうらうへに鉛の如く靜かに重く冷たし。
泣けるわが影は

氷の如く、霞の如く、透きとほる影の身なれば、
わが聲を聽きわかぬにやあらん。

われは胸も裂くるばかり苛立ち、
扉の方より馳せ入らんと、
三たび五たび甲板の上を繞れど、
皆堅く鎖して入るべき口も無し。
もとの硝子窓に寄りて足ずりする時、
第三のわが影艫の方の渦巻く浪にまじり、
青白く長き手に拔手きつて泳ぎつつ、
「は、は、は、は、そは皆物好きなるわが夫の君の

われを試す戯れぞ」と笑ひき。
さめて後、われは其第三のわれを憎みて、日ひと日腹だちぬ。

XLIII

たそがれの路、
森の中に一すぢ……
呪はれた路、薄白き路、
靄の奥へ影となり遠ざかる、
あはれ死にゆく路。

うち沈みて靜かな路。
もともと何の木である、
その枯れた裸の腕を擧げ、

小暗きかなしみの中に、
心疲れた路を見送る。

たそがれの路の別れに、樺の木と
櫟の森は氣が狂れたらし、
あれ谺響が返す幽かな吐息……
幽かな冷たい、調子はづれの高笑ひ……
また幽かな啜り泣き……

蛋白石色の珠數珠の實の
頸飾を草の上に留め、

薄墨色の音せぬ古池を繞りて、
靄の奥へ影となりて遠ざかる、
あはれ、たそがれの森の路……

XLIV

東京の正月の或日、
うれしくも戀しき人の手紙著きぬ。

「今わが船の行くは北緯一度の海、
白金色の月死せるが如く眞上の空に懸り、
甲板に立てる人皆陰影を曳かず。」——

「印度洋の一千九百十一年
十二月二日の日の日の出の珍しさよ、美くしさよ、

輝紅の濡れ色に、
鮮かな橄欖青を混へし珍しさよ、華やかさよ。」

「二十の旋風器は廻れども、
食堂のあひも變らぬむし著さ。
今宵も青玉色の長い裾を曳く
英吉利西婦人のミセス、ロオズが
人の目を惹く話しぶり、
それに、流れ渡りの一人もの、
素性の知れぬ諾威人が氣を取られ、
果物マンゴスチインを下手に割れば、

指もナフキンも紅く染む。

かゝることあまた書きて、
若やかに跳れる旅人の心うらやまし。
寒きかな、寒きかな、東京は
霙となりて今日も暮れゆく。

XLV

一切を要す、
われは憧るる靈なり。
物吝みなせそ、
若し齎す物の猶ありとならば。——
始めに取れる果實は年經れど紅し、
われこそ物を損ぜずして愛づるすべを知るなれ。

XLVI

「常に杖に依りて行く者は
その杖を失ひし時、自らをも失はん。
われは我にて行かばや」とわれ語る。
友は笑ひてさて言ひぬ。
「な欺きそ、
戀人の名を聞くだにも涙さしぐむは君ならずや。」

XLVII

古き物の猶権威ある世なりければ、
彼は日本の女にて東の隅にありき。
また彼は精錬せられざりしかば、
鑛の儘なりき。
みづからを黄金の質と知りながら……あなあはれ。

XLVIII

競馬の馬の打勝たんとする鋭さならで、
曲馬の馬は我を棄てし
服從の素速き氣轉なり。

曲馬の馬の痩せたるは、
競馬の馬の逞しく美くしき優形と異りぬ。
常に飢じきが爲。

競馬の馬もいと稀に鞭を受く。

されど寧ろ求めて鞭打たれ、その刺激に跳る。
曲馬の馬の爛れて癒ゆる間なき打傷と何れぞ。

競馬の馬と曲馬の馬と
偶ま市の大通に行き會ひし時、
競馬の馬はその同族の墮落を見て涙ぐみぬ。

曲馬の馬は泣くべき暇も無し、
慳貪なる黑奴の曲馬師は
廣告のため、樂隊の囃しに伴れて彼を歩ませぬ……

XLIX

物を書きさし、思ひさし、
廣東蜜柑を剝いたれば、
藍と鬱金に染まる爪。——
江戸の昔に廣重の
名所づくしの繪を刷つた
版師の指は斯うもあらうか。
藍と鬱金に染まる爪。

堅苦しく、うはべの律義を喜ぶ國、
しかも、かゝるはづみなる移り氣の國、
支那人ほどの根氣なくて、淺く利己主義なる國、
阿米利加の富なくて阿米利加化する國、
疑惑と戰慄とを感ぜざる國、
男みな背を屈めて宿命論者となり行く國、
めでたく、うら安く萬々歳の國。

II

髪かき上ぐる手ざはりが
何やら溫泉場に在るやうな
輕い氣分にわたしをする。
この間に手紙を書きませう、
朝の書齋は凍れども、
「君を思ふ」と巴里宛に。

LII

たそがれに似るうす明り――
二月の庭の木を透きて、
赤むらさきのびろうどの、
異國模樣を滑る時。

たそがれに似るうす明り――
赤むらさきのびろうどの
窓掛に凭るわが肌を
夢となりつつ繞る時。

たそがれに似るうす明り——
朝湯あがりの身を斜に、
輕く項を抱きかかへ、
つくづく君を思ふ時。

LIII

女は有るかぎり
粗刻の明治の女ばかり、
只ひとり、かの若い詩人が居て、
今日の會は引きたつ。
永井荷風の書く如き
叙情詩的な物云ひ、
また歌麿の版畫の
「上の息子」に似た身のこなし。
それは誰れ……

LIV

わが小い娘の髪を撫でるとき、
なにかしら生れ故郷がおもはれる。
母がこと亡き姉のこと伯母がこと、
あれや、それ、とりとめも無い事ながら、
片時は黄金の雨が降りかかる。

LV

三月の晝のひかり——
わが書齋に這ふ藤むらさき……
その中に光の顏の白、
七瀨の帶の赤、
机に掛けた布の脂色、
みな生生しく溫かに………
されど唯だ瓶の彼岸ざくらと、
わが姿とは淡く寒し。
君の久しく留守なれば

静物の如く我は在るらん。

LVI

障子あくれば、うす明り――
静かに暮れるたそがれに、
をりをりまじる淡雪は
錫箔よりもたよりなし。
ほつれた髪にとりすがり、
わたしの顔をさし覗く
雪のこころのさびしさよ、
涙となつて融けてゆく。
雪のこころもさうであろ、

ましてわたしはなんとしませう。

LVII

たそがれ時か、あけがたか、
わたしの泣くのは決り無し。
蛋白石色のあの空が
ふつと渦巻く海に見え、
波間にもがく白い手の、
老けたサツフオオ、死にきれぬ
若い心のサツフオオを
ありあり眺めて共に泣く。
また虻が啼く晝さがり、

金の箔おく連翹と、
銀と翡翠の象篏の
丁字の花の香の中に、
熱い吐息をほつと吐く
若い吉三の前髪を
わたしの指は撫でながら、
微風の樣に泣いて居る。

LVIII

牛込見附の青い色……
わけて柳のさばき髪………
それが映つた濠の水……

柳の蔭のしつとりと
黒く濡れたる朝じめり………
垂れた柳とすれすれに
白い護謨輪の馳せ去れば、
あとに我子の靴の音……

黄色な電車を遣り過し、
見上げた高い神樂坂、
何やら輕く人込に
氣おくれのするこころよさ。

わが子の手からすと離れ、
風船玉が飛んで行く…………
軒から軒へ揚り行く…………

LIX

良人の留守の一人寝に、
わたしは何を著て寝やう。
日本の女のすべて著る
じみな寝間著はみすぼらし、
非人の姿「死」の下繪、
わが子の前もけすさまじ。
わたしは矢張ちりめんの
夜明の色の茜染、

長襦袢をば擇びましよ。
重い狹霧がしつとりと
花に降るよな肌ざはり、
女に生れたしあはせも
これを著るたび思はれる。

斜に裾曳く長襦袢、
つい解けかかる襟もとを
輕く合せるその時は、
何のあてなくあこがれて
若さに逸るたましひを

じつと抑へる心もち……

それに、わたしの好きなのは、
白蠟の灯にてらされた
夢見ごころの長襦袢、
この匂はしい明りゆゑ、
君なき閨もみじろげば
息づむまでに艶かし。

兒等が寝すがた、今一度、
見まはしながら灯をば消し、

寒い二月の床のうへ、
こぼれる脛を裾に巻き、
つつましやに足曲げて、
夜著を被けば、可笑しくも
君を見初めたその頃の
娘ごころに歸りゆく。

旅の良人も今ごろは
巴里の宿のまどろみに、
極樂鳥の姿する
わたしを夢に見て居るか。

LX

わたしはあまりに氣が滅入る。
なんの自分を案じましよ、
君を戀しと思ひ過ぎ、
引き立ち過ぎて氣が滅入る。

初戀の日は歸らずと、
わたしの戀の大琴に
その彈き歌は用が無い。
昔にまさる燃える氣息……

昔にまさるため涙……
人目をつつむ苦しさに、
鳴りを沈めた琴のいと、
じつと哀しく張り詰める。

巴里の大路を行く君は
わたしの外に在るとても、
わたしは君の外に無い、
君の外には世さへ無い。

君よ、わたしの遣瀬なさ………
三月待つ間に身が細り、
四月の今日は狂ひ死に
するかとばかり氣が滅入る。

人並ならぬ戀すれば、
人並ならぬ物おもひ………
其れもわたしの幸福と
思ひ返せど氣が滅入る。

昨日の戀は朝の戀、

またのどかなる晝の戀。
今日する戀は狂ほしい
眞赤な入日の一さかり。

とは思へども氣が滅入る。

若しも其儘、旅に居て
君歸らずばなんとせう。
わたしの胸は今裂ける。

LXI

眞赤な花のいく盛り——
透きとほつたる眞紅から、
うす紫を少し帶び、
さては、ほんのり上白み、
また物恨むしつこさの
黒味に移るいく盛り——
君よ、棄ておくこと勿れ、
眞赤な花が泣くものを。

LXII

押しやれども、
またしても膝に上る黒猫……

生きた天鵞絨よ、
憎からぬ黒猫の艶めく手ざはり。

ねむたげな黒猫の目、
その奥から射る野性のちから。

どうした機會やら、折折、
綠金に光るわが膝の黑猫……

LXIII

衣桁の帯からこぼれる
艶めいた晝の光の肉色……………
その下に黒猫は目覺めて、
あれ、思ふ存分伸びをする。
この世界をわが物のこころもち…………

LXIV

打つ眞似をすれば、
尾を立てて後しざる黑猫、
まんまろく、かはゆく………
しかし、わたしの手は
錫箔のやうに薄く冷たく閃いた。
おお厭な。

LXV

跣足で歩いた粗樸な代の人が
石笛を戀の合圖に吹くような雲雀、
九段の坂を上るとて
鳥屋の軒で啼く雲雀、それを聞けば、
わたしの二人の子を預けて置く
玉川在の瑠璃色の空で啼いた雲雀が
薄くらがりの麥畑で
村のわんぱくに捕られたのおや無いか。
雛から鳥屋で育つた雲雀と知りながら、

五町すぎ、七町すぎ、
うちの門まで氣に掛る雲雀。

LXVI

春が來た。
せまい庭にも日があたり、
張物板の紅絹のきれ、
立つ陽炎も身をそそる。

春が來た。
亞鉛の屋根に、ちよちよと、
妻に焦れて、まんまろな
ふくら雀もよい形。

春が來た。
遠い旅路の良人から
使に來たか、見に來たか、
わたしを泣かせに唯だ來たか。

春が來た。
朝の汁にきりきざむ
蕗の薹にも春が來た、
青いかなしい春が來た。

LXVII

ちぎれちぎれの雲見れば、
風ある空もむしやくしやと
むか腹立てて泣きたいか。

さう云ふ間にも粒なみだ
泣いて心が直るよに、
春の日の入り、臙脂さした
よい目元から降りかかる。

ぬらせ、ぬらせ、
わが髪(かみ)ぬらせ、通(とほ)り雨(あめ)。

LXVIII

二夜三夜こそまろ寝もよろし。
君なき寝屋へ入ろとせず、
椅子ある居間の月あかり、
黄ざくら色の衣を著て、
つつましやかなうたた臥し……
まだ見る夢はありながら、
うらなく明くる春のみじか夜。

LXIX

赤くぼかした八重ざくら、
その蔭ゆけば、ほんのりと、
歌舞伎芝居に見るやうな
江戸の明りが顏にさし、
ひと枝折ればむすめ氣の……
おもはゆながら絃につれ
何か一さし舞ひたけれ。

さてまた、小雨ふりつづき、

目を泣き脹す八重ざくら、
その散りがたの艶めけば、
豊國の繪にあるやうな、
繻子の黒味のおちついた
むかしの帶をきゆうと締め、
身もしなやかに眺めばや。

LXX

久しき留守に倚りかかる、
君が手なれの竹の椅子。
とる針よりも、絲よりも、
女ごころのかぼそさよ。

膝になびいた一ひらの
江戸紫に置く刺繡は、
ひまなく戀に燃える血の
眞赤な胸の罌粟の花。

花に添ひたる海の色、
ふかみどりなる罌粟の葉は
君が越えたる浪形に
流れて落ちるわが涙。

さは云へ、女のたのしみは
わが繍ふ罌粟の「夢」にさへ
花をば搖る風に似て
君が呼吸こそ通ふなれ。

LXXI

虞美人草の散るままに、
淫れた風も肩先を
深く斬られて血を浴びる。

虞美人草の散るままに、
畑は火焔の渠となり、
入日の海へ流れ行く。

虞美人草も、わが戀も、

ああ散るままに、散るままに、
散るままにこそまばゆけれ。

LXXII

散りがたの赤むらさきの牡丹の花、
青磁の大鉢の中に微かにそよぐ。
悏なるむだづかひの終りに
早くも迫る苦しき日の怖れを回避する心もち……
ええ、よし、それもよし。

LXXIII

女、女、
女は王よりもよろづ贅澤に、
世界の香料と、貴金屬と、寶石と、
花と、絹布とは女こそ使用ふなれ。
女の心臟のかよわなる血の花瓣の旋律は
ワグネルの音樂のどの傑作にも勝り、
湯殿に隱りで素肌のまま足の爪切る時すら、
女の誇りに印度の佛も知らぬほくそゑみあり。
言ひ寄る男をつれなく過す自由も

女に許されたる樂しき特權にして、
相手の男の相場に負けて破產する日も、
女は猶戀の小唄を口吟みて男ごころを和ぐ。
たとへ放火殺人の大罪にて監獄に入るとも、
男の如く二分刈とならず、黑髮は墓のあなたまで浪打ちぬ。
婦人運動を排する諸聲の如何に高ければとて、
女は何時までも新しきゲエテ、カント、ニウトンを生み、
人間は永久うらわかき母の慈愛に育ちゆく。
女、女、日本の女よ、
いざ諸共に自らを知らまし。

LXXIV

西洋蠟燭の大理石よりも白きを硝子の鉢に燃し、
夜更くるまで黑檀の卓に物書けば幸福多きかな。
あはれこの梔花色の明りこそ
咲く花の如き命を包むゝ想像の狹霧なれ。

これを思へば晝は詩人の領ならず、
天つ日は詩人の光ならず、
蓋し阿弗利加を沙漠にしたる惡しき熱の氣息のみ。

うれしきは夢と眩惑と暗示とに富める白蠟の明り。
この明りの中に五感と頭腦とを越え、
全身をもて嗅ぎ、觸れ、知る刹那――
一切と個性とのいみじき調和、
理想の實現せらるる刹那は來り、
ニイチエの「夜の歌」の中なる「總ての泉」の如く、
わが歌は盛高になみなみと迸る。

LXXV

わたしの庭の「かくれみの」
常緑樹ながらいたましや、
時も時とて、朱萸にさへ、
枳殻にさへ花の咲く
夏の初めにいたましや、
みどりの枝のそこかしこ、
たまたまひと葉二葉づつ
日毎に目立つ濃い鬱金、
若い白髪を見るやうに

染めて落ちるがいたましや。
わたしの庭の「かくれみの」
見ては泣くのが悪かろか。

LXXVI

初夏が來た、初夏は
髮をきれいに梳き分けた
十六七の美少年。
さくら色した肉附に、
ようも似合うた詰襟の
みどりの上衣、しろづぼん、

初夏が來た、初夏は
青い焰を沸き立たす

南の海の精である。
きやしな前齒に麥の莖
ちよいと嚙み切り吹く笛も
つつみ難ない火の調子。

初夏が來た、初夏は
ほそいづぼんに、赤い靴、
杖を振り振り驅けて來た。
そよろと匂ふ追風に、
枳殻の若芽、けしのはな、
青梅の實も身をゆする。

初夏が來た、初夏は
五行ばかりの新しい
戀の小唄をくちずさみ、
女の呼吸のする窓へ、
物を思へと、蒼白い
百合の陰翳をば投げに來た。

LXXVII

崖の上なる教會の
古びた壁の脂の色、
常に靜かでよけれども、
高い庇の陰にある
圓い小窓の摺硝子、
誰やら一人うるみ目に
空を見上げて泣くやうな、
それが淋しく氣にかかる。

LXXVIII

黄と、紅と、みどり、
生な色どり……
飴細工のやうなチユウリツプの花よ、葉よ。
それを活ける白い磁の鉢、
きしやな女の手、
た、た、た、と注す水のおと。
ああ、なんと生〱した晝である。
飴細工のやうなチユウリツプの花よ、葉よ。

LXXIX

皐月なかばの晴れた日に、
氣早い蟬が一つ啼く。
何とて啼いたか知らねども、
森の若葉はその日から
火を吐くやうな息をする。

君の心は知らねども……

LXXX

虻のうなりか、わが髮に
觸れて呼吸つくそよ風か、
遠い木魂か、噴水か、
ををりをり斯んな聲がする。
「君もわたしも出來るだけ
物の中身を吸ひませう。
今日のよろこび、行くすゑの
夢のかぎりを盡しませう。」

LXXXI

ああさみだれよ、昨日まで、
そなたを憎いと思つてた。
魔障の雲がはびこつて
地を亡ぼそと降るやうに。

もし、さみだれが世に絶えて
唯だ乾く日のつづきなば、
都も、山も、花園も、
サハラの砂となるであろ。

戀を命とする身には
涙の添ひてうらがなし。
空を戀路にたとへなば
そのさみだれはため涙。

降れ、しとしとと、しとしとと、
赤をまじへた、溫かい
黑の中から、さみだれよ、
網形に引け、銀の絲。

ああ、さみだれよ、そなたのみ――
わが名も骨も朽ちる日に、
埋れた墓を洗ひ出し、
涙の手もて拭ふのは。

LXXXII

うすく紅さす百合の花、
ひと花づつを、朝ごとに
開けば、どうやら、わが頼む
よい幸福はまのあたり………

うすく紅さす百合の花、
ひと花づつを、朝ごとに
散らせば、あたら、わが夢も
しばし香りて消えて行く。

うすく紅さす百合の花、
よし幸福でないとても、
またかりそめの夢とても、
わたしは花をじつと嗅ぐ。

LXXXIII

若い娘の言ふことに、
「別れを述べる時が來た、
美くしい花、にほふ花、
わたしの無垢な日送りに、
さびしい友であつた花、
今日までわたしを慰めた
やさしい花のかずかずに、
別れを述べる時が來た。
花の神様さようなら。

わたしは愛の神様に
手をば執られて參りましよ。」

若い娘の言ふことに、
「別れを述べる時が來た、
美くしい花、にほふ花。
彌生に代る初夏の
靑い海から吹いて來る
五月の風に似た男、
若い、やさしい、あたたかな、
生生としたあの男、

男の中の花男、
すべての花に打勝つて、
その目にわたしを引附けた。」

若い娘の言ふことに、
「別れを述べる時が來た、
美くしい花、にほふ花。
おお、その上に、よい聲で、
いつもわたしを呼び慣れた
赤い小鳥よ、そなたにも、
別れを述べる時が來た、

どれどれ籠から放しましよ。
濟まないながら、今日からは、
燃えた、やさしいくちびるの
外に聞きたい聲もない。」

LXXXIV

臺所の閾に腰すゑた
古洋服の酔つぱらひ、
そつとしてお置きよ、追はずにね。
物もらひとは勿體な……
髪の亂れも、蒼い目も、
パウドレエルに似てるわね。

LXXXV

若い娘の言ふことに、
「雲雀よ、雲雀、
そなたは空で誰を喚ぶ。
――それは何うでもよいわいな――
わたしは君の名をば喚ぶ。
晝は百たび、
夜は二百たび。」
若い娘の言ふことに、

「あれ、あの青い
空であらうか、君の名は。
——それに違ひがないわいな——
ひとり小聲で喚ぶたびに、
沈んだ心も、
しんぞ高くなる。」

若い娘の言ふことに、
「また、あの燃える
お日様であろ、君が名は。
——さうでないとは誰が言はう——

わたしの心を眩暈させ、
熱い吐息を
投げぬ間もない。」

若い娘の言ふことに、
「ああ、君が名を
喚ぶと云うても口の中、
――それを何うして君が知ろ――
自分が喚んで聴くばかり。
雲雀よ、雲雀、
音の高い雲雀。」

LXXXVI

つやなき髪に燒鏝を
誰が當てよとは言はねども、
はずみごころに縮らせば、
燒けてほろほろ膝に散り、
半うしなふ前髪の
くちをし、悲し、あぢきなし。
あはれと思へ、三十路へて
なほ人戀ふる女の身。

LXXXVII

羽の斑は刺青か、
短氣な樣な蝶が來る。
今日の入日のかなしさよ。
思ひなしかは知らねども、
短氣な樣な蝶が來る。

LXXXVIII

濱の日の出の空見れば、
茜木綿の幕を張り、
靜かな海に敷きつめた
廣重の繪の水淺葱。
(それもわたしのおもひなし、)
あちらを向いた黑い島。

LXXXIX

わたしの上を掠めて通らぬ雲ならば、
勝手に曇れ、
勝手に渦巻け、
わたしの足もとの遠い雲。
憎悪の風に、
愚癡のしぶき雨、
嘲りの霰をまじへた、
低い低い通り雲。

わたしの上には、水色の
ひろい空、日輪の金の點。
けれど、なんだか氣に掛る、
あれ、あの地平線に見えるのは
不安な黒い雲の羽。
それとも、わたしに二度歸る
空飛ぶ馬の持つ羽か。
けれど、なんだか氣に掛る。

XC

いざ、天の日はわがために
黃金の車を輾らせよ。
颶風の羽は東より
いざこころよく我を追へ。

黃泉の底まで泣きながら、
賴む男を尋ねたる
その昔にもえや劣る。
女の戀のせつなさよ。

晶子やものに狂ふらん、
燃ゆるわが火を抱きながら、
天がけり行く、西へ行く。
巴里の君へ逢ひに行く。

XCI

あはれならずや、その雛を
荒巌の上の巣に遺し、
戀しき兄鷹を尋ねんと、
颶風の空に下りながら、
雛の啼く音にためらへる
若き女鷹の若しあらば——
それは窶れて遠く行く
今日の門出のわがこころ。
いとしき子等よ、ゆるせかし、

しばし待てかし、わかき日を
猶夢にみるこの母は
汝が父をこそ頼むなれ。

XCII

水に渇えた白緑の
ひろい麥生を、ずと斜に
翔る燕のあわてもの、
何の使に急ぐのか、
よろこびあまる身のこなし。

續いて、さつと、またさつと、
生あたたかい南風
ロアルを越して吹く度に、

白楊の樹がさわさわと
待つてゐたよに身を搖る。

河底にゐた家鴨等は
岸へ上つて、アカシヤの
蔭にがやがや啼きわめき、
燕は遠く去つたのか、
もう麥畑に影も無い、

それは皆〱よい知らせ、
暫くの間に風は止み、

雨が降る、降る、ほそぼそと
金の絲やら絹の絲、
眞珠の絲の雨が降る。

嬉しや、これが佛蘭西の
雨にわたしの濡れ初め。
輕い婦人服に、きやしやな靴、
ツウルの野邊の雛罌粟の
赤い小路を君と行き。

濡れよとままよ、濡れたらば、

わたしの帽のチウリツプ
いつそ色をば增しませう、
增さずば捨てて代りには
野にある花を摘んで挿そ。

そして昔のカセドラル
あの下蔭で休みましよ。
雨が降る、降る、ほそぼそと
金の絲やら、絹の絲、
眞珠の絲の雨が降る。

（ロアルは佛蘭西南部の河の名なり。）

539

XCIII

ほんにセエヌ川よ、いつ見ても
灰がかりたる淺みとり……
陰影に隱れたうすものか、
泣いた夜明の黒髪か。

いいえ、セエヌ川は泣きませぬ。
橋から覗くわたしこそ
旅にやつれたわたしこそ……

あれ、じつと、紅玉(ルビイ)の涙(なみだ)のにじむこと………
船(ふね)にも岸(きし)にも灯(ひ)がともる。
セエヌ川(かは)よ、
やつぱりそなたも泣(な)いてゐる、
女(をんな)ごころのセエヌ川(かは)……

XCIV

眞赤な土が照り返す
だらだら阪の二側に、
アカシヤの樹のつづく路。

あれ、あの森の右の方、
飴色をして屋根と屋根、
あの間から群青を
ちらと抹つたセエヌ川……

涼しい風が吹いて來る、
マロニエの香と水の香と。

これが日本の畑なら
青い「ぎいす」が鳴くであろ。
黄ばんだ麥と雛罌粟と、
黄金に交ぜたる朱の赤さ。

誰が挽き捨てた荷車か、
眠い目をして、路ばたに
じつと立つたる馬の影。

「MONSIEUR RODIN の別莊は。」
問ふ二人より、側に立つ
KIMONO 姿のわたしをば
不思議と見入る田舍人。

「ムシユウ・ロダンの別莊は、
ただ眞直に行きなさい、
木の間から、その庭の
風見車が見えませう。」

巴里から來た三人の
胸は俄かにときめいた。
アカシヤの樹のつづく路。

XCV

空をかき裂く羽の音……

今日も飛行機が漕いで來る。

巴里の上を一すぢに、

モンマルトルへ漕いで來る。

ちよいと望遠鏡をわたしにも……

一人は女です……笑つてる……

アカシヤの枝が邪魔をする……

何処へ行くのか知らねども、
毎日飛べば大空の
青い眺めも淋しかろ。

かき消えて行く飛行機の
夏の日中の羽の音………

XCVI

あれ、あれ、通る、飛行機が
今日も巴里をすぢかひに、
風切る音をふるはせて、
身輕なこなし、高高と
羽をひろげたよい形。

オペラ眼鏡を目にあてて、
空を踏まへた膽太の
若い乗手を見上ぐれば、

少し捻つた機體から
きらと反射の金が散る。

若い乘手のいさましさ、
後ろを見捨て、死を忘れ。
片時やまぬ新らしい
力となつて飛んで行く、
前へ、未來へ、ましぐらに。

XCVII

（一）

閾を内へ跨ぐとき、
墓窟の口を踏むやうな
暗い怖えが身に迫る。

煙草のけぶり、人いきれ、
酒類の匂ひ、灯の明り、
黒と桃色、黄と青と……

あれ、はたはたと手の音が
きもの姿に帽を著た
わたしを迎へて爆ぜ裂ける。

鬼のむれかと想はれる
人の塊、そこかしこ。
もやもや曇る狹い室。

（二）

淡い眩暈のするままに

君が腕を輕く取り、
物珍らしくさし覗く
知らぬ人等に會釋して、
扇で半ば顔を隱し、
わたしは其處に掛けて居た。

バウドレエルに似た像が
荒い苦悶を食ひばり、
手を後ろ手に縛られて
煤びた壁に吊された、
その足もとの横長い

粗木づくりの腰掛に。

（三）

「この酒場の名物は、
四百年へた古家の
きたないことと、飄輕な
また正直なあの老爺、
それにお客は漫畫家と
若い詩人に限ること。」
こんな話を友はする。

（四）

濶い股衣の大股に
老爺は寄つて、三人の
日本の客の手を取つた。
伸びるがままに亂れたる
髮も頰髭も灰白み、
赤い上被、青い服、
それも汚れて裂けたまま。
太い目元に皺の寄る
屈托のない笑顏して、
盛高の頰と鼻先の

林檎色した美くしさ。
老爺の手から、前の卓、
わたしの小さい杯に
注がれた酒はムウドンの
丘の上から初秋の
セエヌの水を見るやうな
濃い紫を湛へてた。

（五）

「聴け、我が子等」と客達を

叱るやうなる叫びごゑ。

考爺はやをら中央の
麥稈椅子に掛けながら、
マンドリンをば膝にして、

「皆さん、今夜は珍しい
日本の詩人をもてなして、
ヹルレエヌをば歌ひましよ。」

老爺の聲の止まぬ間に

拍手の音が降りかかる。

赤い毛をした痩形の
モデル女も泳ぐよに
一人の畫家の膝を下り、
口笛を吹く、手を擧げて。

（巴里モンマルトルの「暗殺の酒場」にて）

XCVIII

知らざりしかな、昨日まで、
わが悲みをわが物と。
あまりに君にかかはりて。

君の笑む日をまのあたり
巴里の街に見る我の
あはれ何とて淋しきか。

君が心は跳れども、

わが熱かりし火は濡れて、
自ら泣く時きたる。

わが聞く樂はしほたれぬ、
わが見る薔薇はうす白し、
わが執る酒は酢に似たり。

ああ、わが心已む間なく、
東の空にとどめこし
我子の上に歸りゆく。

XCIX

君は何かを讀みながら、
マロニエの樹の染み出した
斜な徑を花の香の
濡れて呼吸つく方へ去り、
わたしは毛欅の大木の
しだれた枝に日を避けて、
五色の絲を巻いたよな
圓い花壇を左にし、
少しはなれた紫の

木立と、青い水のよに
ひろがる芝を前にして、
繪具の箱を開けた時、

おお、雀、雀、
一つ寄り、
二つ寄り、
はら、はら、はらはらと、
十、二十、數知れず、
きやしやな黄色の椅子の前、
わたしへ向いて寄る雀。

それ、お食べ、
それ、お食べ、
今日もわたしは用意して、
麵麭とお米を持つて來た。

それ、お食べ、
雀、雀、雀たち、
聖母の前の鳩のよに、
素直なかはいい雀たち。
わたしは國に居た時に、

朝起きても筆、
夜が更けても筆、
祭も、日曜も、春秋も、
休む間なしに筆とつて、
小鳥に餌をば遣るやうな
氣安い時を有たなんだ。

おお美くしく圓い脊と
小い頭とくちばしが
わたしへ向いて並ぶこと。
見れば何れも子の様な、

わたしの忘れぬ子の樣な………
わたしは小聲で呼びませう、
それ光さん、
かはいい七ちやん、
秀さん、麟坊さん、八峰さん………
あれ、まあ擧げた手に怖れ、
逃げる一つのあの雀、
お前は里に居た爲めに
親になじまぬ佐保ちやんか。

わたしは何か云つて居た、

氣が狂ふので無いか知ら………
どうして氣安いことがあろ、
あゝ、氣に掛る、氣に掛る、
子供の事が又しても………

せはしい日本の日送りも
心ならずに執る筆も、
身の衰へも、わが髪の
早く落ちるも皆子ゆゑ。

子供を忘れ、身を忘れ、

こんな旅寝をはるばると
思ひ立つたは何ゆゑか。
子をば育む太切な
母のわたしの時間から、
雀に餌をばやる暇を
偸みに來たは何ゆゑか。

うつかりと君が言葉に絆されて…………

いいえ、いいえ、
みんなわたしの心から………

あれ、雀が飛んでしまつた。
それはあなたのせいでした。
みんな、みんな、雀が飛んで仕舞ひました。

あなた、わたしは何うしても
先に日本へ帰ります。
もう、もう繪なんか描きません。
雀、雀、
モンソオ公園の雀、

そなたに餌をも遣りません。

わが知れる一柱の神の御名を讃へまつる。
あはれ缺けざることなき「孤獨清貧」の御靈、
グレンドウの命よ。

グレンドウの命にも著け給ふ衣あり。
よれよれの皺の波、酒染の雲、
煙草の燒痕の霰模樣。

もとより痩せに痩せ給へば、

衣を透して乾物の如く骨だちぬ。
背丈の高きは冬の老木のむきだしなる如し。

グレンドウの命の顳顬は音樂なり、
斷えず不思議なる何事かを彈きぬ。
どす黒く青き筋肉の蛇の節廻し……

わが知れる藝術家の集りて、
女と酒とのある處、
グレンドウの命必ず暴風の如く來りて罵り給ふ。

何處より來給ふや、知り難し、
一所不住の神なり、
きちがひ茄子の夢の如く過ぎ給ふ神なり。

グレンドウの命の御言葉の荒さよ。
人皆その眷屬の如くないがしろに呼ばれながら、
猶この神と笑ひ興ずるを喜びぬ。

CI

あれ、あれ、あれ、
後から後からとのし掛つて、
ぐいぐいと喉元を締める
凡俗の生の壓迫………
心は氣息を次ぐ間もなく、
どうすればいいかと
唯だ右ひだりへうろうろ………

もう之が癖になつた心は、

大やうな、初心な、
時には迂濶らしくも見えた、
あの好いたらしい様子を丸で失ひ、
氷のやうに冴えた
細身の刄先を苛苛と
ふだんに尖らす冷たさ。
そして心は見て見ぬ振…………
凡俗の生の壓迫に
思ひきりぶつ突かつて、
思ひきり撥ねとばされ、

ばつたり壓しへされた
これ、この無慘な蛙を――
わたしの青白い肉を。

けれど蛙は死なない、
びくびくと顫ひつづけ、
次の刹那に
もう直ぐ前へ一步、一步、
裂けてはみ出した膓を
兩手で抱きかかへて跳ぶ、跳ぶ。
そして此人間の蛙からは血が滴れる。

でも猶、心は見て見ぬ振………
泣かうにも涙が斷れた、
叫ばうにも聲が立たぬ。
乾いた心の唇をじつと嚙みしめ、
默つて唯だらうろうろと踠くのは、
人形だ、人形だ、
苦痛の彈機の上に乗つた人形だ。

CII

被眼布したる女にて我がありしを、
その被眼布は却りて我れに
奇しき光を導き、
よく物を透して見せつるを、
我が行く方に淡紅き、白き、
とりどりの石の柱ありて倚りしを、
花束と、沒藥と、黄金の枝の果物と、
我が水鏡する青玉の泉と、
また我れに接吻けて羽ばたく白鳥と、

其等みな我れの傍を離れざりしを。

あな、あはれ、我が被眼布は落ちぬ。
天地は忽ちに狀變り、
うすぐらき中に我れ立つ。
こは既に日の入りはてしか、
夜のまだ明けざるか、
はた、とこしへに光なく、音なく、
望なく樂みなく、
唯だ大なる陰影のたなびく國なるか。

否とよ、思へば、
これや我が目の俄かにも盲ひしならめ。
古き世界は古きままに、
日は眞赤なる空を渡り、
花は綠の枝に咲きみだれ、
人は皆春のさかりに
鳥のごとく歌ひ交し、
うま酒は盃より滴れど、
我れ一人そを見ざるにやあらん。
否とよ、また思へば、幸ひは

かの肉色の被眼布にこそありけれ、
いでや再びそれを結ばん。
我れは戰く身を屈めて
闇の底に冷たき手をさし伸ぶ。

あな、悲し、わが推しあての手探りに、
肉色の被眼布は觸るる由もなし。
とゆき、かくゆき、徘徊る此處は何處ぞ、
かき曇りたる我が目にも其れと知るは、
永き夜の土を一際黑く壓す
靜かに寂しき扁柏の森の蔭なるらし。

装幀畫

カット　　　　　　　　藤島武二氏

挿畫

リユクサンブル公園の噴水

麝香撫子

セエヌ川の小雨

落葉

附録　著者習作二畫

フォンテンブロウの白樺

モンサウ公園

（金子製本）

大正二年十二月廿一日印刷
大正三年一月一日發行

金壹圓八拾錢

著作者　與謝野晶子

東京市麹町區平河町五丁目五番地
發行者　金尾種次郎

東京市京橋區西紺屋町二十七番地
印刷者　佐久間衡治

東京市京橋區西紺屋町二十七番地
印刷所　株式會社秀英舍

發兌元
東京市麹町區平河町五丁目五番地
金尾文淵堂
（特別電話番町二〇九三番　振替東京三八一七番）